

印度佛教編年史

講師 村上專精 稿

緒言

古來佛教者ノ佛教ヲ研究スル状態ヲ見ルニ歴史的ノ觀念ニ乏シキヲ見ル而シテ世間百科ノ學理ヲ研究スル景況ヲ見ルニ年ヲ重テ日ヲ追ヒ益々歴史的研究ノ方向ニ進ミ來ルヲ見ル此ニ由テ余佛教ヲ歴史的ニ研究スルノ必要ヲ感セリ然リトイヘトモ此事ヤ余ノ敢テ爲シ得ヘキ業ニハアラサルナリ何トナレハ凡ソ歴史ノ攷究ハ博覽強記ト思想敏捷ノ人ニアラザンハ爲スト能ハサル業ナルカ故ナリ凡ソ人事ハ現在ノ事實トイヘトモ甲ノ云トコロ乙ノ傳ルトコロ丙ノ語ルトコロ丁ノ説クトコロ一致セス此ニ依テ孰レヲ眞トシ何レヲ虚トスヘキ乎吾人ヲシテ其判斷ニ苦シマシムト間之アルモノナリ然ラハ幾多ノ年數ヲ經タル過去ノ事蹟ヲ尋テ千万ノ海山ヲ隔テタル遠國ノ狀

能ヲ知ラントスル歴史ノ攷究ハ博覽強識ト思想鋭敏ノ人ニアラザレハ爲シ得ヘカラサル業ナルト思フテ知ルヘキナリ否若シ余ヲ以テ充分ニ云ハシメハ**歴史的古代事實ノ真相ハ縱ヒ博覽強識ノ人ヲリトモ凡人トシテ明瞭ニ知リ得ルト能ハサルモノナリト云ントス何トナレハ古代ノ事實ハ遺書ト遺物ニ徴シテ考察テ下ス外他ニ方法ユレナク而シテ其遺書遺物ナルモノモ之ヲ信スレハ信スルモノ、又之ヲ疑テ見レハ一モ確實ナル證據トスヘキ價直ナキモノト成レハナリ**

然リト雖モ人ハ知ルヲ要スルモノナリ人ハ知ルヲ要スルカ故ニ未タ之ナキ未來ノ事ヲモ知ラントスルモノナリ况ヤ已ニ之アリシ過去ノ事ヲ放棄スヘクンヤ例令事實ノ確定シカタキアリトスルモ其不明瞭ナリト云フタニ尋テ知ラサルヘカラス然ラハ歴史ノ研究豈放棄スヘクンヤ此ニ由テ余ハ寡聞淺識殊ニ史學ノ思想ニ乏シキ者ナントモ敢テ此任ニ當リ今ヨリ後數年ヲ期シ佛教歴史ノ研究ニ從事セントノ志ヲ發セリ事ノ成否ハ是ヨリ余ノ生命ト勉勵ノ如何ニアルノミ

前述ノ如ク余ハ是ヨリ少クモ五七年ヲ期シ若シ事成レハ佛教史ヲ世ニ公ニセント欲スル者ナリ今己ニ攷究シタル者ニハアラス然ルニ頃日哲學館ニ出テ偶々佛教史ニ關スル講義ヲナセシトニロ館主井上君ヨリ之ヲ講義録ニ載フテテ深ク望ミタリ余ハ實ニ今日之ヲ世間ニ發表スルヲ好マス余ハ不完全ナルモノヲ公衆ニ發表スルヲ最モ厭ヘリ然リト雖モ井上君ノ依囑亦辭シカタクシテ終ニ少シク調ヘタル事ヲ載録スルヲトナセリ故ニ豫メ左ノ數件ヲ讀者諸君ニ告クオカソ

- (一) 余ハ佛教ノ歴史ヲ研究スルニツキ先ツ印度ヨリ始メ後支那日本ニ移ントスル者ナリ
- (二) 印度ノ歴史ヲ調ヘントスルニハ方今歐米人ノ印度ニ入テ取調ヘタル地理歴史ノ書ヲ參考スヘキトノ最必要ヲ信セサルニアラス然リト雖モ余ハ泰西ノ文字ヲ見ルヘキ眼ナキ者ナリ之ニ由テ余ハ只支那譯ノ佛書并ニ支那撰述ノ書ニ付テ探索スルノミ
- (三) 佛典中ニハ完全ナル歴史ノ書籍ナシ然リト雖モ支那日本ノ如キハ探究稍

易キヲ覺ユントモ印度ノ事蹟ハ更ニ漢トシテ知ルニ由シナキモノナリ是レ  
余カ印度ノ佛教史ヲ調アルニ就キ最モ困難ヲ感スルトコロナリ  
(四)支那ノ書籍ニツキ印度ノ佛教史ヲ探究セントスルニハ大藏經中ニ埋レ居  
ル寸言片句ヲ採集シ以テ考察テ下ス外ニハ別路ナキモノナリ而シテ大藏經ト  
イヘハ一千九百十六部、八千五百三十四卷縮刷藏經ノ多キニ至ルヲナレハ容  
部數卷數  
易ノ業ニハアラサルナリ故ニ今日探索ノ行届カサルヲハ後日ニ補訂スル考  
ヘナリ

(五)史學ヲ研究スルニハ種々ノ方法アリテ或ハ編年敘事ニ止マルモノアリ或  
ハ推理考察ヲ旨トスルアリ或ハ考證的研究ヲ要スルアリテ一定セズ然レト  
モ余ハ主トシテ第一種ノ方法ニ依リ傍ラ第三種ノ方法ニ依ルヲアルヘシ第二  
種ノ如キハ余ノ敢テ爲サ、ルトコロナリ故ニ題スルニ編年史ヲ以テス

### 第一期 釋迦牟尼佛の開教

#### 第一章 釋尊出世の年代考

凡ソ國史ヲ研究セントスルニハ先ツ其國開闢ノ紀元ヲ定メサルヘカラス紀元ヲ

定メスシテ史ヲ編ントスルハ恰モ柱ノ用意ナクシテ家屋ヲ構造セントスルカ如  
キモノナリ人誰カ其愚ヲ笑ハサラン此ニ由テ佛教史ノ研究モ第一着ニ定メ置ク  
ヘキハ釋尊出世ノ年代是ナリトス何故ナレハ釋尊出世ノ年代ハ即チ佛教史上ノ  
紀元トナルカ故ナリ

然ルニ釋尊出世ノ年代ハ人一定セルカ如ク思ヘトモ博ク搜索スレハ異說多々紛  
トシテ適從スルトコロナキモノ、如シ余ハ斯ノ如キ異說ヲ採録スレハ却テ初入  
ノ人ヲシテ岐路ニ彷徨セシムル恐ニアリト雖モ史學研究ノ做ヒトシテ之ヲ陰覆  
スルヲ得ス故ニ博ク古今ノ異說ヲ集録シ後ニ聊カ評決スルヲアラントス請フ其  
繁ヲ責ル勿レ

歷代三寶記第一卷 支那隨ノ開皇十七年ニ費長房ノ自說ト他說五種ト都合六說ヲ  
舉タリ其表左ノ如シ  
ニ費長房之ヲ作ル

費長房ノ自說 周第十九主莊王十年ニ當リ佛ハ印度ニ生ル

一法顯傳ニ依テ推歩スル說 殷武乙二十六年

二沙門法上ノ說 周第五主昭王二十四年甲寅出生

異說三像正記ノ説 周第十七主平王四十八年午出生

四釋道安ノ説 周第十八主桓王五年丑出生 羅什ノ年紀并ニ石柱ノ

五趙伯休ノ説 周第二十九主貞定主二年甲出生

右ハ歷代王寶記ニ列ル所ナリ而ノ異説ノ第五趙伯休ノ説ト云ハ伯休衆聖點記ニ依テ推歩シタルモノナリ衆聖點記ノ事ハ大唐内典錄第四卷撰道宣ニ出テ、佛祖統記三十八紙佛祖通載八終ニ出ス今ハ内典錄ノ全文ヲ擧テ讀者ノ參考ニ供セシ善見毘婆沙律十八卷

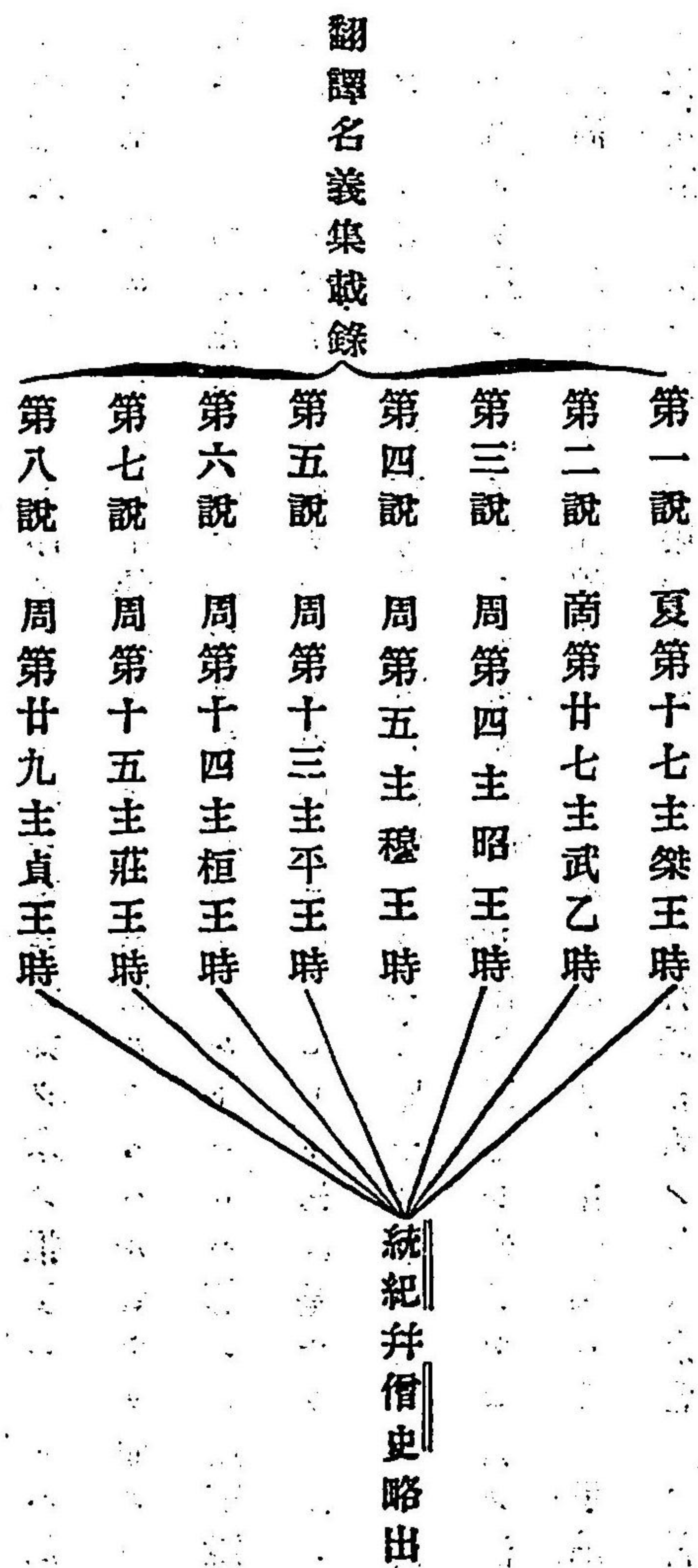
右一部一十八卷武帝世外國沙門僧伽跋陀羅齊言僧衆師資相傳云佛涅槃後優波離既結集律藏訖即於其年七月十五日愛自恣竟以香花供養律藏便下一點置律藏前年年如是優波離欲涅槃時付弟子陀寫俱陀寫俱欲涅槃時付弟子須俱欲涅槃時付弟子悉伽婆伽婆欲涅槃時付弟子目健連子帝須目健連子帝須欲涅槃時付弟子旃跋陀闍如是師資相付至今三藏法師三藏法師將律藏至廣州臨上舶返還去以律藏付弟子僧伽跋陀羅羅以永明六年共沙門僧猗於廣州竹林寺譯出此善見毘婆沙因共安居以永明七年庚午歲七月半受自恣竟如前師法以香華供養律藏訖即下一

點當其年計得九百七十五點點是一年趙伯休梁大同元年於廬山值苦行律師弘度得此佛涅槃後衆聖點記年月訖齊永明七年伯休訪弘度云自永明七年已後云何不復見點弘度答云自此已前皆是得道聖人手自下點貧道凡夫止可奉持頂戴而已不敢輒點伯休因此舊點下推至梁大同九年癸亥歲合得一千二十八長房依伯休所推從大同九年至今開皇十七年丁巳歲合得一千八十二年若然則如來滅度始出千

年去聖尙遠深可歡慶願共勵誠同宣遺法云云  
右内典錄ノ文ヲ熟讀シテ衆聖點記ノ事情ヲ知ルヘシ此ニ注意スヘキハ費長房ハ伯休ガ梁ノ大同九年ヨリ一千〇二十八年前ニ佛出生セリト推歩スルニ依レハ支那周ノ第廿九貞定王二年ニ當リト云フ是ナリ余ヲ以テ推スニ梁ノ大同九年ヨリ一千〇二十八年前ハ周第廿七主敬王三十五年ニ當ル而シテ此ハ佛滅ノ年代ニシテ佛生ノ年代ニアラス佛生ノ年代ハ敬王三十五年ヨリ尙八十年前ト見サルヘカラス然ラハ周第廿五主靈王八年酉丁ニ佛ハ出生セリト云フニ成ル然ルニ統記ニ八翻譯名義集三廿五僧史略一紙等皆伯休推歩ノ説ハ佛ノ出生周貞定王ノ時ニ當レリト記スルハ費長房ノ誤推ヲ傳ヘタルモノナラン何ニシテモ衆聖點記ニ依

レハ佛生ハ梁ハ大同九年ヨリ一千〇二十八年前ニ當ルト云フヲ忘ルヘカラス  
 尙注意スヘキハ法顯傳ニ依レハ殷ノ武乙廿六年ニ當ルト云フモノ是ナリ余法顯  
 傳ヲ檢スルニ傳三十三ニ泥洹己來一千四百九十七年トアル文ノ外ニ佛生佛滅ノ時  
 代ヲ説タル文アルヲ見ス而シテ法顯ハ晉隆安四年姚秦弘ニ長安ヲ發シ行路六年  
 ヲ經テ中印度ニ到リ停ル六年ニ及ヒ歸路三年ヲ經テ晉義熙十年始姚秦弘ニ還版  
 セル人ナリ之ニ依テ法顯ノ中印度滯留中即チ晉義熙五年ヨリ起算シテ傳ニ謂ル  
 一千四百九十七年前ハ周第一主成王二十六年ニ當レリ而シテ此ヨリ更ニ八十年前  
 ハ殷ノ第廿九主帝乙廿四年ニ當レリ果シテ然ラハ法顯傳ニ依ルニ佛滅ハ周成王  
 二十六年ニシテ佛生ハ殷帝乙二十四年ニ當ルトイハサルヘカラス費長房ハ何ノ  
 見ル所アリテ武乙二十六年ニ當ルト乎費長房一回此推歩ヲナスニ由リ統記名義  
 集僧史略等皆法顯ハ殷ノ武乙ノ時ニ佛出生ノ説ヲ傳ヘタルモノ、如ク記セリ蓋  
 シ一犬虛ヲ吹シハ万犬實ト傳ル風情ナルモノカ  
 然レドモ余更ニ明教大師ノ正宗記第一卷七ニ云トコロヲ以テ考ルニ敢テ之ヲ費  
 長房ノ誤謬トモ斷定シカタキナリ其故ハ夏殷周三代ノ帝王在位ノ年時ト云モノ

ハ當時ノ記録區々紛々トシテ一定セサルモノナリ故ニ長房ノ取ル三代帝王ノ在位  
 年限ハ目今ノ史家ニ謂トコロノ三代帝王ノ在位年限トハ殊ナルカモ測リ難シ既  
 ニ三代帝王ノ在位年限ヲ定ルコト今ト異ナルカ故ニ推歩屬當スルトコロノ結果今  
 ト符合セサルモノ乎伏シテ識者ノ考ヲ俟ツ  
 一僧史略上初紙佛祖統紀三八紙ヲ見ルニ七説ヲ列ヌ又翻譯名義集三廿ニハ初ニ五  
 説ヲ出シ更ニ聖賢錄ノ八説ヲ擧タリ今合シテ之ヲ表スルニ左ノ如シ



此中第八説ハ即チ趙伯休ノ説ナリ故ニ前ニ云如ク余ノ推歩ニ依レハ周第廿九主貞定王ノ時ニアラス周第廿五主靈王八年ニ當ルトイヘル説ナリ而ノ右ノ名義集并ニ僧史略統紀ニ多説ヲ舉レトモ著者自ノ取ルトコロハ等シク第三説ノ周第四主昭王二十四年寅ニ當リテ釋迦ハ印度ニ出生セリト云説是ナリ唯此ノミナラス凡ソ支那日本ニ於テ古今輩出スル高僧多クハ周昭王ノ時ニ釋尊ハ出生セリト云説ヲ取レリ唐ノ法淋ノ如キ(破邪論上)四辨正論第五卷ヲ参考セヨ齊ノ法上師ノ如キ(續高僧傳第十卷參考)元魏ノ曇護最ノ如キ(廣弘明集第一集古今佛道論衡第一參考)又明教大師ノ正宗記第一ノ如キ寶洲師ノ釋氏稽古ノ如キ念常師ノ佛祖通載ノ如キ佛生ハ周昭王時代ニ當ルト云説ヲ取ル者最モ多キナリ右異説ノ外西域記六十七紙ニハ玄奘印度ニアリテ傳ルトコロノ四説ヲ舉テ曰ク自佛涅槃諸部異議或云千二百餘年或云千三百餘年或云千五百餘年或云已過九百未滿千年ト然ラハ印度ニアリテモ異説紛起シテ彼此六百年ノ異ヲ見ルニ至レリト知ルヘシ而ノ余カ前ニ表スル支那ノ各説ハ西域記ニ出ル説ト合スルカ否カヲ討ヌルニ若

シ現今取ルトコロノ夏殷周三代年歴ニ依テ推算スレハ一モ合スルモノナキカ如シ但シ西域記ニ列スルトコロハ凡ソノ年代ニシテ確カニ何年ト定メタルモノニ非レハ其合セサルモ敢テ怪ムニ足サラルコナリ然レトモ余試ニ西域記ノ説ヲ以テ推算スレハ左ノ如キ結果ヲ得タリ

- 第一 一千三百年前……………周惠王二十四年(西洋紀元前六百六十年)
- 第二 一千四百年前……………周幽王六年(西洋紀元前七百六十年)
- 第三 一千六百年前……………周穆王四十八年(西洋紀元前九百六十年)
- 第四 一千五十年前……………周貞定王十一年(西洋紀元前三百六十年)

右ハ西域記ノ前三説ニハ假ニ百年ヲ増加シ第四説ニハ其中間ヲ取テ假ニ九百五十年ト視ナシ更ニ百年ヲ増加シ而シテ唐ノ貞觀十年ヨリ起算セシ者ナリ其ハ何故ナレハ西域記ノ前三説ニハ皆餘トアリ然ラハ多少餘剩ノ年數ナカル可ラス且、西域記ノ示ストコロハ佛滅ノ年代ニシテ佛生ノ年代ニハアラサルナリ而シテ今ハ佛生ノ年代ヲ尋ヌルコナレハ更ニ七十九年ヲ増加セサル可ラス之ニ由テ余假ニ百年ツ、ヲ増加セシ者ナリ又玄奘ノ印度行ハ唐貞觀三年ニ國ヲ發シ同

(111)

十九年ニ郷ニ歸レリ之ニ依テ余試ニ唐貞觀十年ヲ起點トシテ推算セシモノナリ  
 斯ノ如ク推算シテ見ルトコロ一モ前ニ列サタル諸説ニ符合スルノ結果ヲ見  
 サルナリ抑モ西域記ニ錄スル所ハ大凡ノ年數ナレハ彼ニ就テ穿鑿ノ時間ヲ費  
 スモ徒勞ニ屬スルコトナレトモ或ハ參考ノ一助ト思ヒ之ヲ記スモノナリ  
 已上支那日本ニ傳ヘタル異説ヲ舉テ終ル(余此頃世尊降生入滅記ト題スル一書ヲ  
 得タリ 日本享保十四年十一月出版沙 然ルニ右列記スル説ノ外ヲ出テス)故ニ是ヨ  
 リ進テ外邦ニ傳ハル異説ヲ舉テ外邦ノ中ニテ最モ佛教ノ盛榮ヲ窮ムル西藏國ノ  
 異説ヲ先ツ示サンカ西藏國ニハ最モ多ノ異説アルモノト見エタリ其表左ノ如シ

第 一	紀元 前一千七百六十二年	支那年曆 黃帝ノ時	紀元 前二千四百廿二年
第 二	同 一千四百八十四年	唐堯二年	同 二千一百四十四年
第 三	同 一千四百七十九年	唐堯七年	同 二千一百三十九年
第 四	同 一千四百七十五年	唐堯十一年	同 二千一百三十五年
第 五	同 六百五十年	商盤庚六年	同 一千三百十年

第 六	同 四百年	商紂王四十三年	同 一千六十年
第 七	同 二百二十四年	周懿王十二年	同 八百八十四年
第 八	同 二百二十二年	周懿王十四年	同 八百八十二年
第 九	同 二百二十年	周懿王十六年	同 八百八十年
第 十	同 一百七十七年	周共和五年	同 八百三十七年
第 十一	同 九十二年	周平王十九年	同 七百五十二年
第 十二	紀元 後八年	周惠王廿四年	同 六百五十三年
第 十三	同 八十五年	周簡王十年	同 五百七十六年
第 十四	同 一百十五年	周靈王廿六年	同 五百四十六年

右ハ南條文雄君明治十八年四月刊行ノ令知會雜誌第十三號ニ佛陀迦耶誌ニ依  
 テ記載セラレタリ余ハ右雜誌ニ依リ此表ヲ作ルモノナリ而シテ右ハ凡テ佛滅ノ  
 年代ニシテ佛生ノ年代ニハアシスト云フヲ忘ルヘカラス

次ニ錫蘭島ニ傳ルトコロハ當明治廿六年ヨリ二千五百十七年ノ前第四若クハ第  
 五ノ滿月ニ當ル日ニ釋迦佛出生シ又本年ヨリ二千四百三十七年前ニ當リ壽八十

歳ニシテ釋尊ハ入滅セリト云一説アルゾミ他ニ異説アルヲナシ面メ此説ハ錫蘭ノ史乘并ニ婆羅門ノ書類阿育王ノ碑文等ニ徴スレバ確トシ疑フヘカラスト云云余之ヲ此頃舶來スルだんまばう氏ニ尋ルニ彼レ此答ヲ爲セリ又令知會雜誌第十四號ニ出ル南條氏ノ穿鑿モ此ト違ハス

次ニ緬甸并ニ暹羅ニ傳ルトコロノ説ハ余未タ確カメス南條君ハ西洋紀元前六百二十八年ニ佛降誕シ同紀元前五百八十九年ニ佛入滅セリ故ニ佛在世四十年ナリト云ハ緬甸人ノ傳ルトコロニシテ暹羅人ノ説モ此ニ接近セリト云云余考ルニ佛ノ在世ヲ四十年間トスル他ニ類例ヲ見サル奇説ナリ按スルニ此ハ成佛ト入滅ノ間ニ於ケル年代ヲ云ニアラサル乎

又故笠原研壽君曾テ英國牛津ニアリテ起稿セル佛涅槃年代考アリ僧墨遺稿ノ中ニモ出ル右笠原君ノ年代考ニハ二説ヲ出ス其一ハ英國ノかんじんぐ氏印度ノ内地ニアリテ發見シタル阿育王建立ノ碑文ニ依テ推算シタルモノ是ナリ其ハ

日本紀元後一百八十三年 支那周敬王四十二年 西洋紀元前四百七十八年ニ當リ佛入滅スト云説ナリ其二ハ英國まぐすみゆーらる氏ノ推歩セルモノ是ナリ其ハ

日本紀元後一百八十四年 支那周敬王四十三年 西洋紀元前四百七十七年ニ當リ佛入滅スト云説ナリ(此外尙異説アレトモ畧ス)

抑モ何故ニ釋尊出世ノ年代ニ斯ク異説ヲ生シタルカ曰ク三由アラソ(一)印度ノ國俗ハ記憶ヲ主トナシ史乘ノ書載ヲ要セサルカ故ニ多ク年數ヲ重ヌルニ隨ヒ終ニ異説ヲ派生セシモノナラン(二)偶々史篇ニ記載アルモ年代ノ久キ數字ノ誤謬アルヨリシテ異説ヲ發生セシモノナラン(三)外道ト佛教ト宗教上ノ軋轢ヨリシテ相互ニ

教祖ノ出世ヲ或ハ古クセントシ或ハ新クセント欲シ遂ニ後人ノ胸臆ヨリ新説ヲ搆造スル者ナキニ非ルヘシ既ニ支那ニアリテハ釋尊ト老子ノ出世ニツキ前後ノ諍ヒハ數之アリシイ史乘多ク見エタリ異説ノ生スル原由恐ク然ラン且夫支那夏殷周三代ノ帝王在位ノ年數判然セサルイハ支那ニ來リテ異説ヲ生シタル一大原因タルヲ疑フヘカラスト

正宗紀一  
七丁參考

而ノ右異説ノ中何レヲ正トスヘキカハ最モ要件ナリ然ト雖モ余之ヲ判定スルヲ得ス何トナレハ明瞭ノ史傳ナクシテ已ニ幾千年ヲ經過スレハナリ若シ疑テ見レハ各説皆疑フヘシ假令歐米人ノ考證ニ係ル者ト雖モ豈奚ソ確乎不拔ト信仰スヘ



クンヤ彼レかんじん氏ガ阿育王ノ碑文ヨリ考ヘタリト云モノモ其阿育王出世ノ年代既ニ不明瞭ナレハ隨テ釋尊出世ノ年代モ不明瞭ナリトイハサルヘカラス且ツ夫レ外邦ニ傳ルトコロハ印度ノ内地ニ入テ考證シタル確説ナリトスレハ支那日本ニ傳ヘ來ルモノモ其本ヲ尋ヌルニ印度ノ内地ヨリ來ル博識高德家ノ口ヨリ出タルモノナリ支那ノ各説ハ皆支那人ノ想像ヨリ出タルモノト云フカラス果シ然ラハ容易ニ支那日本ニ傳來セル衆説ヲ廢シ敢テ外邦即チ西人ノ探究ニ出タリト云説ヲ取ルヘカラス之ヲ要スルニ考證的史學研究ニ依レハ釋尊出世ノ年代ハ歲月ノ久シキ爲メ且ツ史篇ノ乏シキカ爲メ渺トシ難シト云ヘキ也然リト雖モ史學研究トシテハ強テ之ヲ定メサルヘカラス何トナレハ之ヲ定メサレハ佛教史ノ紀元立セサルカ故ナリ之ニ依テ余ハ他邦ノ説ヲ用ヒス本邦支那ノ説ヲ用ヒ本邦支那衆説ノ中ニテ佛ハ周昭王時代ニ生レ周穆王時代ニ滅スト云説ニ依ントス但シ趙伯休ノ説ハ大ニ事實トスヘキ價直アリト雖モ古來ノ高僧彼ヲ用ル人希ナレハ吾レ敢テ彼ヲ取ルコト好マス而シテ其周昭王時代ニ生レタマフト云ニ就キ或ハ昭王九年トスルアリ正宗記一紙三等是ナリ或ハ昭王廿四年トスルアリ僧史略上紙等是ナリ或ハ昭王廿五年トスルアリ佛祖通載三紙等是ナリ或ハ廿六年トスルアリ三寶威通錄第四等是ナリ中ニ於テ余ハ昭王二十四年ト云ニ從フ者ナリ又其周穆王時代ニ入滅セリト云ニ就キ或ハ穆王五十一年トスルアリ教行信證第五卷是眞大師撰述是ナリ或ハ穆王五十二年トスルアリ法苑珠林第一百廿卷等是ナリ或ハ穆王五十三年トスルアリ佛祖統紀四紙等是ナリ或ハ穆王三十六年トスルアリ正宗記一紙六等是ナリ中ニ於テ余ハ穆王五十一年ト云ニ從フ者ナリ抑モ余カ右多説アル中選テ周昭王時代ノ出誕ニシテ周穆王時代ノ入滅ト云説ヲ取ル所以ハ本ト後漢明帝ノ請聘ニ應シ印度ノ佛法ヲ始メテ支那ニ齎シ來ル摩騰ト竺法蘭ノ二人ガ明帝ノ問ニ答ヘタル説ニシテ法上墨漢最法琳并ニ法苑珠林佛祖統紀佛祖通載名義集釋氏稽古略僧史略并ニ吾朝ノ傳教大師是眞大師日蓮上人等凡ソ古今ノ高僧皆用ユルトコロナルカ故ナリ而シテ昭王時代ノ中テハ二十四年ト云ニ從ヒ穆王時代ノ中テハ五十一年ト云ニ從フ所以ハ余現今ノ史家ニ用ル年號ト干支ニ依テ之ヲ推算スルカ故ナリ抑モ古今周昭王時代ノ出誕ト云ニ就テ異説

等是ナリ或ハ昭王廿四年トスルアリ僧史略上紙等是ナリ或ハ昭王廿五年トスルアリ佛祖通載三紙等是ナリ或ハ廿六年トスルアリ三寶威通錄第四等是ナリ中ニ於テ余ハ昭王二十四年ト云ニ從フ者ナリ又其周穆王時代ニ入滅セリト云ニ就キ或ハ穆王五十一年トスルアリ教行信證第五卷是眞大師撰述是ナリ或ハ穆王五十二年トスルアリ法苑珠林第一百廿卷等是ナリ或ハ穆王五十三年トスルアリ佛祖統紀四紙等是ナリ或ハ穆王三十六年トスルアリ正宗記一紙六等是ナリ中ニ於テ余ハ穆王五十一年ト云ニ從フ者ナリ抑モ余カ右多説アル中選テ周昭王時代ノ出誕ニシテ周穆王時代ノ入滅ト云説ヲ取ル所以ハ本ト後漢明帝ノ請聘ニ應シ印度ノ佛法ヲ始メテ支那ニ齎シ來ル摩騰ト竺法蘭ノ二人ガ明帝ノ問ニ答ヘタル説ニシテ法上墨漢最法琳并ニ法苑珠林佛祖統紀佛祖通載名義集釋氏稽古略僧史略并ニ吾朝ノ傳教大師是眞大師日蓮上人等凡ソ古今ノ高僧皆用ユルトコロナルカ故ナリ而シテ昭王時代ノ中テハ二十四年ト云ニ從ヒ穆王時代ノ中テハ五十一年ト云ニ從フ所以ハ余現今ノ史家ニ用ル年號ト干支ニ依テ之ヲ推算スルカ故ナリ抑モ古今周昭王時代ノ出誕ト云ニ就テ異説

アレントモ其干支ヲ定ル<sup>一</sup>ハ摩騰已來一致シテ甲寅ノ年トス又周穆王時代ノ入滅  
 ト云ニ付テ異説アレントモ其干支ヲ定ル<sup>一</sup>ハ摩騰已後一致シテ壬申トナス而シテ周  
 平王元年已前ハ干支ト年代ヲ詳ニ配合シタル年表ナクシテモ周平王元年ハ辛未  
 ニ當ルト云<sup>一</sup>ハ明瞭ナリ故ニ周平王元年ヨリ逆ニ起算スレハ平王元年ヨリ一百  
 八十年前ハ穆王五十一年ナリ而シテ辛未ヨリ一百八十年目ハ即チ壬申ト成ル果  
 然ラハ穆王ノ壬申ニ當ルヲ實トスレバ年代ハ第五十一年トセサルヘカラス是眞  
 大師ノ明仰クヘシ既ニ穆王五十一年ヲ壬申トスレハ昭王ノ甲寅ハ昭王第廿四年  
 トスヘキナリ何トナレハ釋尊ノ壽命ハ七十九年ナリ而シテ壬申ヨリ七十九年目ハ  
 甲寅ト成リ且其甲寅ハ即チ昭王二十四年ニ當ルカ故ナリ余ハ此ノ如キ推算ノ結  
 果ヲ得タルカ故ニ統紀二紙<sup>二六</sup>ニ一ノ考記ヲ得テ甲寅ハ昭王二十六年ト云モ用ヒス  
 又世尊降生年代記<sup>十一</sup>紙ニ壬申ハ穆王ノ五十三年ニ當ルト云モ亦取ラサルナリ四裔  
 年表ニ配當スル干支ハ最モ疑ハシキカ故ニ余ハ彼ヲモ取ラサルナリ  
 因ニ考定スヘキハ釋尊ノ壽命是ナリ抑モ釋尊ノ壽命ヲ古來多クハ八十歳ナリト  
 云フ然レ共實ハ七十九歳ナリ尤モ金光明經西域記第六等ニハ八十歳ト説ケトモ

彼ハ大數ナルモノナリ今七十九歳ナリト云説ヲ出サハ佛般泥洹經<sup>晉白法下卷ニ</sup>  
 曰ク年亦自至七十有九惟斷生死廻流之潤(中略)北首枕手右脇臥屈膝累脚便般泥洹  
 ト佛説方等般泥洹經<sup>東晉失下卷ニ</sup>曰ク自我爲聖師年至七十九所應作者已究暢汝  
 其勉之夜已半矣(中略)便般泥洹ト之ニ依テ正宗記<sup>一六</sup>如來示同世壽凡七十九歳ト  
 云々通載<sup>三丁</sup>五世尊示涅槃應世七十九年ト云々統紀並ニ歷代三寶記等ニハ何歳ト  
 極メサレトモ其入滅ヲ年代ニ配スルトコロヲ以テ見ルニ同シク七十九歳トスル  
 意ナリ果シテ然ラハ釋尊ハ生壽七十九歳ニシテ入滅シタマヘリト定ムヘキナリ<sup>余</sup>  
 ニ大數ニ依リ八十歳トスレトモ其  
 實ハ都テ七十九ト改ムヘキナリ  
 上來續々説キ來ルトコロヲ要スルニ佛法ノ教主釋迦牟尼如來ガ此土ニ出現シ且  
 ツ入滅シタマヘル年代ハ左ノ如シト云ニアリ  
 佛生 當明治二十六年ヨリ二千九百二十二年  
 佛滅 當明治二十六年ヨリ二千八百四十三年前  
 更ニ攷究スヘキハ釋尊出生ノ月日ト同入滅ノ月日はナリ此ニモ種々異説アル  
 ナレハ左ニ表セン

出生月日

二月八日 長阿含經第四等是ナリ

三月八日 佛所行證第一等是ナリ

三月十五日 西域記第六十二云云

四月八日 因果經瑞應經十二遊經本行經佛說灌佛經等是ナリ

二月八日 長阿含經第四菩薩處胎經第一等是ナリ

二月十五日 南本涅槃經第一善見毘婆娑律第一等是ナリ

入滅月日

四月八日 泥洹經下卷佛說灌佛經等是ナリ

八月八日 薩婆多論九卷引用等是ナリ

八月十五日 月德太子經三十二引用等是ナリ

九月八日 婆娑論第一百九十一西域記第六等是ナリ

右ノ如ク出生ト入滅ノ月日ニ就テモ異說多キカ故ニ之ヲ取捨セントスルニハ博ク群書ヲ搜索ノ判斷ヲ下サルヘカラス然レトモ冗長ニ亘リ讀者ノ倦怠アラントテ恐レテ今之ヲ略シ只古來正說トスルトコロヲ示スヘシ曰ク釋尊ハ四月十五日ニ出誕シ二月十五日ニ入滅シタマヘリト云モノ是レ古今正說トスル所ナリ近

クハ翻譯名義集第三六紙ヲ披キテ考フヘシ

第二章 釋尊在家ノ行蹟

釋尊ノ傳記ハ別ニ一大編纂ノ勞ヲ取ラザレハ盡スヘキコトハ非サルナリ然レトモ佛敎史トシテ全ク之ヲ棄ルコト能ハス依テ今少シク之ヲ記サントスルニ先ツ釋尊在俗ノ時ニ關スル事件二三ヲ舉示スヘシ

(一) 釋迦ノ氏族 印度ノ國俗ハ婆羅門刹帝利吠舍陀羅ノ四種ニ人類ヲ分チ而モ人種ノ階級ヲ隔ツルコト最モ甚シキコトハ諸經ニ散説スルトコロナリ而シテ釋尊ハ右四種ノ族姓中ニ於テ最モ貴キ刹帝利種即チ建國已來其系圖最モ正シキ王族即チ當時ノ印度ハ十六大國ト分レタル中ノ迦毘國ノ皇帝淨飯王ノ長子ト成リテ出誕セラレタリ其淨飯王ノ家ハ即チ刹帝利種中ノ釋迦氏ナリ抑モ迦毘羅國淨飯王ノ家ニ何故アリテ釋迦トイフ氏名ヲ得タル乎曰ク本行集經五七紙等ニ依レハ中古ノ帝王ニ甘露王トイフアリ而シテ此皇帝ニ二妃アリ第一ノ妃ハ一子ヲ生シ第二ノ妃ハ四子ヲ生ス然ルトコロ第二妃ノ生メル四子ハ皆賢明ノ故ニ衆之ニ服シ第一妃ノ産メル一子ハ衆從フ者少クシ此ニ依テ第一妃ハ妬心ヲ以テ第二妃ノ四子ヲ

帝王三讓之茲ニ甘薦王ハ第一妃ノ言ヲ容レテ等ニ妃ノ子ヲ皆擯ク第一妃ノ子ヲ立テ、太子トナス此ニ由テ第二妃ノ生メル四子ハ去テ雪山ノ邊ニ到リ一部落ヲナセリ爰ニ乘其德ニ歸シ人其仁ニ服シ四方ヨリ民集リ來リテ數年間ニ一強國ノ形ヲナス後父ノ甘薦王ハ先非テ悔ヒ四子ノ所ニ使テ發シ招喚スレトモ四子ハ辭シテ還ラス依テ父甘薦王ハ四子ノ美德ヲ賞シ命スルニ釋迦氏ヲ以テス蓋シ釋迦ハ之ヲ能仁ト譯ス則チ在政ヲ以テ能ク民ヲ化スルノ意ヲ有リ是ヨリ四子ノ後裔ヲ總シ釋迦氏ト呼ビ來ルコトナレリ近クハ釋迦譜一十三統紀五七等見ルヘシ然ラハ釋迦ト云ハ佛俗家ノ氏名ニシテ元ヨリ佛名ニハアラスト云フ知ヘシ

(三) 誕生ノ奇瑞 釋尊ノ出誕セルヤ五印度中至ルトヨロニ吉祥靈瑞ノ多カリシト擧テ數フニカラス語ヲ換テオハ、釋尊ノ生レ給フ年ニ當リ印度全國ニ吉事最モ多ク見ルト云ニアリ其ハ本行集經七丁二ニ樹下誕生品ト云アリ方廣大莊嚴經一紙ニ如來生品ト云アリ普曜經一丁十三ニ欲生時三十三瑞相品ト云アリ釋迦譜一三丁廣ク示ス請フ往テ見ヨ中ニ於テ言フヘキトハ釋尊出生ノ時ニ大聲ヲ發シテ七步セリト云フ是ナリ抑モ此事ヤ釋尊ノ傳ニ關スル書ニハ皆出ルコトニ今之ヲ示サハルヘカラス

抑モ釋尊ハ母摩耶夫人ノ胎中ヨリ出誕シタマヘル時ニ大聲ヲ發シ七步セリト云フハ之ヲ傳記ニ徵スレハ事實トセサルヘカラス而シテ或ハ四方ニ七步スト說クアリ智度論一丁西域記六丁十二等ノ如シ或ハ六方ニ七步スト說クアリ方廣大莊嚴經三丁七ノ如シ或ハ十方ニ七步スト說クアリ大般泥洹經法顯第三第四ノ如キ是ナリ而シテ七步スル時ノ語ヲ譯出スルコト一定セス其文左ノ如シ

瑞應經并ニ西域記曰菩薩生已不扶而行于四方七步而自言曰天上天下唯我獨尊ト佛說灌佛經曰隨地行七步舉右手而天上天下惟吾爲尊當爲天人作無上師ト本起經普曜經二十七日隨行七步顯揚梵音無常教訓我當救度天上天下爲天人尊斷生死苦三界無上使一切無爲常樂ト

智度論一曰菩薩初生時放大光明普徧十方行至七步觀察四方作獅子吼而說偈曰我生胎分盡是最末後身我已得解脫當復度衆生ト

阿育王傳一曰始生之日行七步處遍觀四方舉手唱言此是我之最後生也末後胞胎ト阿育王經二曰生便行七步淨眼觀四方而作獅子吼是我最後身處胎住亦然ト

佛所行讚一曰安庠行七步足下安平趾炳徹猶七星獸王獅子步觀察於四方通達眞實

義堪能如是說此生爲佛生則爲後邊生我唯此一生當度於一切

方廣大莊嚴經三十二紙二曰周行七步時演妙梵音聲我爲大醫王能除生死病我於世間中

爲最尊最勝同經三七紙ニハ六方ニ各七歩スルニ就キ六方ニ各別ノ發語アルカ如

ク六方七歩ノ語ヲ各別ニ譯出セリ又大般泥洹經第三之法顯ニ十方ニ各七歩スルニ

ハ別ノ意趣アルヲ説ケリ往見

南條文雄君云ク普曜經并ニ方廣大莊嚴經ノ原書ナルヘシト思フ梵書ヲ見レハ

西方七歩ノ時ノ語ハアリテ他方七歩ノ時ノ語ハ欠ナシ由テ他方七歩ノ時ノ

語ハ如何ナル語カ梵書ニテハ知ルニ由ナキナリト云々

余右等ノ傳記ヲ對見スルニ譯語ハ殊ナレトモ意義ハ相同セリ而シテ四方六方十方

ノ異說ハアレトモ七歩ト云フハ一定セリ又智度論阿育王讚佛所行讚等ニハ觀察

四方ノ語アリ此ニ依テ之ヲ考ルニ七歩シ且ツ發言アルヲハ事實ニシテ四方六方十

方ト云フハ事實ニアラサル乎其出誕シタマヘルト同時ニ勇壯ノ顔色以テ周圍ヲ

雄視シ初生ノ兒ニモ似合ズ七歩シ七歩スル時ニ吾レ生死ノ苦ハ今ヲ以テ最後ト

ナス吾レ此一生ニ世間無比ノ大聖ト成リテ世間ノ迷者ヲ濟度スヘシト云意味ノ

語ヲ演シタマヘルモノナラシ蓋シ是レ釋尊ヲ通常人種ト視ナシ生理的思想ヲ以

テ見ル者ハ信シ難キヲナレトモ釋尊ヲ以テ非凡ノ佛陀ト見ル者ハ之ヲ信スルニ

餘リアルヲナリ

(三)兒童ノ事蹟 傳記ニ徵スレハ釋尊ノ生レタマフヤ迦毗羅國王城ノ内外ハ動天

震地ノ躁キヲナシ上下相共ニ無上ノ歡悞ヲ極メ互ニ相祝シタルト見ユル蓋シ

出生ノ太子ニハ非凡ノ相貌アリ又奇瑞アリ且ツ天地ノ現象ハ此時ニ際シ種々ノ

吉事ヲ湧出スルニ由リ是ノ太子後ニ即位スレハ五印度ノ全國ヲ併有シ宇宙ニ君

臨スルノ前兆ナラント想像スレハナリ抑モ釋尊ハ出生ノ時ニ七歩シツ、發言ス

ルノ奇瑞アルノミナラス又非凡ノ相貌ヲ具ヘタマヘリ此ニ由テ阿私陀ト稱スル

仙人ハ王城ニ太子ノ出誕アルヲ聞キ遙ニ來リテ太子ノ相貌ヲ一見シ太子ノ未來

ヲ占ナシ豫言ノ云ク此兒後家ニ在レハ當ニ轉輪聖王ト成リテ四海ニ君臨シ仁政

ヲ施スヘシ若シ家ヲ出レハ當ニ佛陀世尊ト成リテ一切生アル者ヲ救濟スヘシ何

トナレハ太子ノ御身ニハ三十二周三十二種ノ非凡ヲ具足スルカ故ナリ然ルニ吾

レ餘命ナクレハ憾ムラクハ此太子成佛ノ時ニ遭遇スルヲ得スト語リテ阿私陀  
 自ラ悲泣セリト云々知應太子ノ相貌尋常一様ナラサルヲ本行集經第九第十二  
 相師占相品私陀問瑞品ト云アリ往見其他釋尊ノ傳記ニ關スルモノ皆此事ヲ載ス  
 且又釋尊太子タル時ノ幼名ヲ悉達多トイフ 西域記七五薩婆曷刺他悉陀唐言一悉  
 切義成舊曰悉達多諷略也ト云々  
 達多トハ此ニ順吉ト譯ス釋迦譜二廿八釋迦氏譜上丁廿出ツ蓋シ何故ニ此名ヲ太子  
 ニ命シタルカト尋ルニ太子出生ノ時順ニ種々ノ吉事ノミ多シ故ニ時人太子ノ出  
 誕ニ由リ幸福ヲ被ルト最モ多シ此ニ由リ群臣相議シ悉達多ト名クルトハ至當ナ  
 ル旨ヲ父淨飯王ニ奏ス此ニ由テ太子ハ悉達多ノ名ヲ得タマヘリ本行集經十  
 紙十佛  
 本行經一紙八瑞應經上五紙修行本起經上十一紙等參考准シテ太子出生ノ吉事ノ多カリ  
 シト思テ知ルヘキナリ

而ノ悉達多太子ハ性來非凡ノ才智ヲ有シ藝能ニ長シ腕力ノ優レタルト亦諸傳ニ  
 喋々スルトエロナリ然リ實ニ太子ハ生レナカラニシテ知ル大聖人ナリト雖モ人  
 生ノ傲ヒニ任セ父王ノ指揮ニ依リ七歳ニシテ學ニ就キ文武兩道ヲ習ヘリ然ルニ  
 太子ハ元ト非凡ノ大聖人ナルカ故ニ數年ヲ期セスシテ諸學ニ通シ諸藝ニ達シ本

ト師範ノ選ニ任スル者モ亦及ハサルト多ク且ツ遠シト云々請フ本行集經十一ノ  
 習學技藝品普曜經三ノ現書品方廣莊嚴經四ノ示書品等ヲ披見セヨ

(四)太子ヲ納妃 太子ノ天才ハ非凡ナリ太子ノ相貌ハ尋常ナラス而シテ太子ハ淨飯  
 王唯一ノ男子ナリ然ラハ其親タル者奚ツ之ヲ愛セザルヤ其之ヲ愛スルト  
 同時ニ成ヘツ之ヲ歡悽ノ境遇ニ栖息セシメント思フ情ハ天然トシ之アルヘキナ  
 リ况ヤ國王ノ富ヲ有スル人ニ於テヤ又一方ノ事情ヲ考ルニ太子ハ曾テ阿私陀  
 仙人占相シテ出家ヲ相アリト云加之太子ハ童子ノ時ヨリ已ニ厭世ノ思想アル  
 一往々ニシテ露顯ス之ニ由テ父淨飯王ハ太子ニ出家ヲ志起シテ恐ルハ一最モ  
 切ナリ故ニ一方ニハ吾子ヲ思フ情愛ト他ノ一方ニハ出家ヲ恐ルハ一深キトニ  
 由リ淨飯王ハ國家ノ富ヲ傾クテ悉達多太子ヲ快天樂地ノ境遇ニ栖息セシメ悽樂  
 以テ太子出家ノ志願ヲ忘レ令シトニ最モ盡力セリ乃チ曇中ノ殿ト塞中ノ殿ト春  
 秋ノ殿ト太子ヲ爲メニ三大樓臺ヲ築キ金銀玉珠ヲ以テ樓上樓下ヲ飾リ山海ノ珍  
 寶ヲ以テ殿内殿外ヲ覆ヘリ而シテ天下ノ美女ヲ徵集シ宮女トナス宮女多キト或ハ  
 六万ト説キ或ハ十万ト記ス宮女多キト此ノ如ク且又太子ニ三ノ妃アリト説ク

唯モ其正妃ト云ヘキハ耶輸陀羅女ナルヲ疑フヘカラス何トナレハ諸傳等シテ耶輸陀羅女ノ世系并ニ彼ト結婚ノ事蹟ヲ喋々記スニモ似ズ他妃ノ事ハ措テ問ハサルカ故ナリ然ルニ奇ナル哉悉達多太子ハ人生無上ノ境遇ニ起臥シ歡樂自在ノ歲月ヲ送迎シナカラ出家ノ意志ハ勃々トソ内ニ惹起リ是等無上ノ歡樂モ太子ノ心ニハ少シモ歡樂トハ認メサル者ノ如シト云々蓋シ尋常ノ人ニ非ルカ故ナル乎茲ニ決斷スヘキハ太子納妃ノ年齡ナリ本行集經十二紙ニハ太子年十九ノ時ニ父淨飯王ハ太子納妃ノ事ヲ群臣ニ謀ルト説クヲ修行本起經上十六瑞應經上九等ニハ太子年十七ニ妃ヲ納ルト説クヲ兩説ノ中太子ノ出家ヲ十九歳トスレハ十七歳納妃ノ説ヲ取ラサルヘカラス何トナレハ太子ハ納妃ノ年ニ出家スルカ如ク説クモノ諸傳ニナシ諸傳一致ニシテ納妃ノ後尙數年間ハ宮中ニ止マルモノ、如ク記スカ故ナリ若シ太子ノ出家ヲ二十九歳トスレハ或ハ十九歳ノ納妃ナル乎而シテ本行集經十四常飾納妃品ニ依レハ太子ハ三妃ヲ納レテ後十年ヲ滿ツル間々宮内ニ在リ曾テ外出セスト説クヲ果シ然ラハ十九納妃廿九出家ト云ハ本行集經ノ説ナリト謂ヘシ出家ノ年齡ハ下ニ論ス

(五) 四方ノ遊觀 佛法ノ眼孔ヲ以テ悉達多太子ヲ見ソカ彼ハ普通ノ人類ニアラス(小乘佛法ナレハ最後身ノ菩薩ナリ大乘佛法ナレハ法身幻化ノ應身佛ナリ)彼ハ元來普通ノ人類ニ非ルカ故ニ彼ノ出家ハ他ニ原因事情ヲ尋ヌルニ及ハス若シ門外漢ノ思想ヲ以テ悉達多太子ヲ見ソカ彼ハ普通ノ人類ナリ普通ノ人類ニシテ人類一般ノ愛シテ止マサル色聲ノ娛樂ヲ顧リミス又人間無上ノ王位ニ心ナク一朝脫俗出家ノ決斷心ヲ發起スルヲハ豈其原因ナカルヘクソヤ豈其事情ナカルヘクソヤ必ス之アルヘキナリ且夫レ其内實ハ普通ノ人類ニアラストスルモ其外貌ハ既ニ普通ノ人類ト成リテ生レタリ然ラハ亦人類普通ノ規則ニ隨ヒ太子ノ出家ニハ何乎ノ原因事情アリテ此舉ヲ爲シ決メ無用ノ贅論ニハ非ルナリ然ラハ何事カ太子ヲシテ脫俗出家セシムル原因ナル乎曰ク四方ノ遊觀是其原因ナリ夫レ悉達多太子ハ人間世界ニアリテ實ニ得ヘカラス最歡最樂ノ境遇ニ栖息セリ然レトモ彼レ太子ハ常ニ快々トシテ樂マサルナリ彼ハ常ニ厭世的ノ思想ヲ懷ケルナリ蓋シ何故ニ太子ハ之ヲ快々トシテ樂マス常ニ厭世的ノ思想ヲ懷ケル乎曰ク凡ソ人生ニハ老病死ノ苦痛アリテ必ス附着ス此苦痛ハ脫離スヘカラス

ル乎又如何スレハ此老病死ヲ免レ得ベキ乎此大疑問ハ太子ノ心中ニ横ハリテ瞬間モ去ル下之ヲキモノ、如シ此大疑問疑テ解ケサルカ故ニ之ヲ解釋セント欲スル願望ハ起ラサルヘカラス而シテ之ヲ解釋セントスル下ハ元ヨリ在俗ノ身トシテ爲シ得ヘキ業ニアラス由テ吾レ出家シテ此大疑問ヲ解釋セント云ハ太子出家ノ第一原因ナリト云旨ハ諸傳ニ皆記ルセリ

然レトモ太子出家ノ直接的大原因トナルモノハ四方ノ遊觀ニアリト云下又諸傳ノ等ク錄スルトコロナリ本行集經第十四第十五ニ出逢老人品道見病人品路逢死屍品アリ普曜經第四ニ四出觀品アリ修行本起經下卷ニ遊觀品アリ往見且夫レ西域記第六九城東南隅有一精舍中作太子乘白馬凌空之像是臨城處也四門外各有精舍中作老病死人沙門之像太子遊觀觀相增懷深厭塵俗于此感悟命僕回駕ト云々又法顯傳十六太子出城東門見病人廻車遠處皆起塔ト云々之ニ依テ之ヲ見ルニ玄奘並ニ法顯ハ彼地ニ至リ太子四方遊觀ノ古跡ヲ實驗シ來リシモノト見ヘタリ

今四方遊觀ノ梗概ヲ述ノ或ル時悉達多太子ハ遠遊ノ志ヲ發シ父王ニ此事ヲ願フ

父王ハ其請ヲ許ルス此ニ由テ太子ハ百官ヲ從ヘテ東方ニ遠遊セリ時ニ路傍拜觀ノ庶民群ヲナス中ニ一人ノ老翁髮髮白ク面皮縮マリ腰曲リ力衰ヘ杖ニ扶ケラレテ漸クニ羸歩スルヲ見ル太子之ヲ見テ曰ク歲月止マラサル下流水ノ如クナレハ今日ノ少年モ老ノ將ニ來ントスル下豈遠カラシヤ然ラハ富貴何ソ愛スヘケン自身何ソ恃ムヘケン世人奚ソ之ヲ怖レサル吾レ之ヲ見レハ遠遊シテ歡樂ヲ食ルニ心ナシト忽チ御者ニ命ソ駕ヲ廻ラシム

少時ヲ經テ太子復父王ノ承諾ヲ求メ遠遊ノ道ニ就ク蓋シ第二回ハ南方ニ向ヘリ此際父王ハ特ニ令テ下ノ路傍ノ警護等ヲ嚴重ニセシム然ルニ不圖拜觀人中ニ病者ノ肉盡キ骨露ハレ衰弱ノ爲メ自ラ歩行スル力ナク外人ニ兩脇ヲ扶持セラレテ路傍ニ立テルヲ見ル太子之ヲ見テ謂ヘラク人既ニ此身アリ然ラハ痛苦ノ繁ヘル下ハ恰モ影ノ添ヘルカ如キモノナリ然ルニ世人何ソ之ヲ怖レサル愚モ亦甚シト云ヘシ吾レ己ニ之ヲ見ル豈奚ソ遠遊悞樂シテ身ノ痛苦ノ繁ヒ來ル下ヲ忘ルヘクソヤ爰ニ於テ復命ソ駕ヲ廻ラシメタリ

少時ヲ經テ太子復父王ノ許諾ヲ得テ遠遊ス蓋シ第三回ハ西方ニ向ヘリ抑モ前二



回ノ遠遊ハ共ニ老者病者ノ爲メ太子ヲシテ遠遊悞樂ノ興ヲ盡サシムルヲ能ハス  
 反テ厭世的思想ヲ助ケタルニ由リ此度ハ父王ヨリ路傍警護ノ達令ヲ嚴ニシ且ツ  
 優陀夷ト稱スル智辨秀逸ノ士ヲ選ンテ太子ニ隨伴セシ百官妓女ノ中ニテ能ク太  
 子ノ意ヲ迎ヘシムヘキ者ヲ選テ隨行セシメタリ然ルニ圖ラザリキ復一群ノ遺族  
 死者ヲ送リ別ヲ傷ミテ悲泣號哭シツ、墓地ニ趣クテ見ル太子之ヲ見テ謂ヘラク  
 凡ソ人已ニ生ル然ラハ誰カ死テ免ルヘキ死ノ生ニ附着スルコトハ貴賤智愚老少ノ  
 隔テナク一般ナリ世人何故ニ之ヲ思ハサル愚モ亦甚シキモノナリ吾レ今既ニ之  
 ヲ見タレハ遠遊以テ悞樂ニ耽ルニ忍ホス宜ク駕ヲ廻スヘシト終ニ復還ル  
 少時ヲ經テ太子更ニ遠遊セントス蓋シ第四回ハ北方ニ向ヘリ此第四回ニハ路傍  
 ニアリテ不吉ノ者ニ遇ハスシテ遊所ノ園林ニ達スルモノ、如シ然ニ園中忽爾ト  
 シテ出家ノ道人アリ通俗ノ服ヲ着セス形容裝束總テ尋常ナラサルヲ見ル太子之  
 ヲ見テ彼ト共ニ談論スルニ彼ハ太子ニ説クニ老病死ノ苦ヲ免ルベキ方術ヲ以テ  
 セリ太子之ヲ聞テ其處ニ止マリ歡樂スルニ意ナク忽チ御車ニ命ノ駕ヲ宮ニ還ラ  
 シム

前ニ陳ル如ク悉達多太子ノ心中ニハ如何ノ老病死ノ苦ヲ免ルヘキ乎ト云大疑問  
 ハ多年間凝結シ居レリ然ルニ右四方ノ遊觀ニ由リ老病死ヲ目撃シタルトコロニ  
 於テ從來ノ大疑問ヲ解釋セント欲スル思想ハ愈々以テ增長シ來レリ更ニ出家道人  
 ノ談話ヲ聞クニ及ヒ太子出家脫俗ノ志シ方ニ決シ千軍万馬ヲ以テスルモ奪フヘ  
 カラサル決斷心ト成リシモノ、如シ  
 已上ハ余ノ意見ヲ雜ヘス純ヲ傳記ニ任セテ大略ヲ陳述スルノミ若シ學術上自由  
 ノ觀察ヲ許サハ太子出家ノ原因ハ他ニ之ヲキニ非ルヘキ乎余亦聊カ其考察ヲキ  
 ニアラサレトモ今ハ記セスシテ此ニ止ム  
 右陳ル如キ太子四方ノ遊觀ハ太子ヲシテ出家ヲ求ル志ヲ決斷セシムル直接ノ原  
 因トハナレルモノナリ其ハ諸傳ニ記錄スルトコロナリ  
 然レトモ余更ニ歴史的自由ノ考察ヲ下スニ太子出家ノ原因ハ啻ニ内部ノ精神界  
 ニ之アルノミナラス又外界ノ社會上ニ之アルニハアラサル乎ツラ、當時ハ印  
 度國ヲ考ルニ政治宗教共ニ太子ヲハ出家ノ斷決心ヲ惹起サシムル原因トハナレ  
 ルモノ、如シ夫レ古代ノ印度ハ群國互ニ割據シ百王共ニ敵視スト云狀況ナリ然

ルニ摩奴ノ一大法典世ニ出テタルニ由リ一時ハ全國ノ宗教政治共ニ法律ノ差配ヲ受ク其整理ヲ見ルニ至リシナリ然レトモ釋尊ノ出テタマヘル頃ハ摩奴ノ法典モ歲月ヲ經ルコノ久キニ隨ヒ國內亦行ハレス十六ノ強國ハ五印度中ニ割據シ列國互ニ雄視シテ各々敵國ノ釁ヲ覲フコトハ恰モ支那國春秋ノ時ニ於ケルカ如キ情況トハナレリ殊ニ釋尊ノ生レタマフ迦毘羅城即チ淨飯王ノ家ハ其系圖テイヘハいと尊トキ皇統ナレトモ淨飯王ノ頃ハ舍衛國摩訶國ノ二大強國ニ隣接シ其國勢ハ餘リニ振ハサルモノ、如シ果ノ然ラハ此際ニ大丈夫ノ精神アル者出レハ驟起奮然トシテ自ラ宇内ヲ統合セント欲スルニアラスハ脱然トシテ塵俗ヲ避ント欲スルノ思想ハ惹起スヘキコトナリ豈奚ソ悠柔不斷ノ身トナリテ空ク朽ルヘケンヤ且又當時印度國ニ行ハレル婆羅門各派ノ宗教ハ其積弊殆ト極度ニ達シタルモノノ如シ諸經ニ散説スルトコロヲ見ルニ或ハ自餓ヲ事トシテ斃ル、アリ或ハ淵ニ身ヲ投シ或ハ大ニ身ヲ燒クコトヲ勤ムルアリ或ハ岸頭ヨリ身ヲ墮シテ死ニ至ラシメ或ハ青草ヲ嚼ミ或ハ人糞ヲ喰ヘルアリ而シテ彼等ハ是等ノ醜行ヲ以テ死後ニ生天受樂スルノ原因トハ成レルモノト迷執セリ實ニ愚モ亦甚シキコトナリ然レトモ

宗教上ノ固執ト云モノハ強然タル國王ノ勢力ヲ以テモ奪フヘカラス嚴然タル三軍ノ兵ヲ整ヘテモ摧クヘカラス明晰ナル法律ノ制裁ヲ以テモ改ムヘカラスナルモノナリ其之ヲ改革セント欲スル方術ハ只自ラ世間ノ塵俗ヲ脱却シテ己レ德望ヲ以テ一世ヲ風靡スル者ト成リ方ニ躬ヲ卓絶タル宗教ヲ組織スルニアラスンハ恐クハ他ニ此ガ改革ヲ試ミル方法ハアルヘカラスナルモノ也此ニ依テ之ヲ觀ルニ太子出家ノ原因ハ密ニ精神的ノ内部ニ之アルノミナラス又當時外部ニ於ケル社會ノ狀況モ亦一原因トハナレリト云ヘキ歟但シ此ハ余暫ク門外漢ノ身トナリテ考察ヲ下スモノナリ佛教家ノ身トシテ敢テ言フヘキコトニハアラサルナリ因ニ辯明スヘキハ佛教ヲ以テ厭世教ナリトスル門外漢ノ批評アルニ就キ佛教家モ喋々辯護ノ勞ヲ取ル者アルコト是ナリ抑モ釋尊出家ノ事蹟上ヨリ論セハ佛教ハ厭世的タルニ相違ナシ然レトモ佛教ハ必シモ厭世教タルニアラサルナリ佛教ハ必シモ厭世教ニアラサントモ亦佛教ヲ以テ必ス樂世教ナリトモ斷言スヘカラス要スルニ迷者ノ位地ニ立入テ説ヲ立ツルトコトハ凡テ厭世的ナリ即チ小乘佛教

ニアリテ三界ハ皆昔ナリト説キ又淨土門ニアリテ厭離穢土欣求淨土ト云カ如キ  
是ナリ又悟者ノ地位ニアリテ説ヲ立ルトコロハ凡テ樂世的ナリ即チ大乘聖道門  
ノ家ニアリテ娑婆即寂光淨土ト説クカ如キ是ナリ余ハ佛教ノミナラス世間ノ道  
徳教モ皆此旨アルモノト信ス然ルニ未タ此旨ヲ説キ得タル人ニ遇ハサルハ遺憾  
ナリ余モ今之ヲ盡スト能ハス他日詳論スヘキナリ

### 第三章 釋尊ノ出家ト成佛ノ年齢考

太子ハ種々内外ノ原因ニ由テ出家シ次テ成佛セリ而シテ其出家ノ年齢并ニ成佛ノ  
年齢ヲ尋ヌルニ一定セズ俗間ニ行ハル、釋尊ノ傳記ヲ見レハ十九出家ニシテ三  
十成道ナルト疑ヒナキモノ、如ク記セトモ其ハ僧祐ノ釋迦譜ト道宣ノ釋迦氏譜  
ノ外ヲ見サルニ由ルモノナリ若シ博ク藏中ヲ搜索スレハ此事一定セサルモノナ  
リ請フ先ツ異説ヲ抄録セン

#### 第一 十九歳出家之説

過去現在因果經二紙八日爾時太子年十九心自思惟我今正是出家之時中太子  
心自念言我年已至一十有九今是二月復是七日定應方便思求出家今正是時云云

修行本起經下紙五日至年十九四月七日誓欲出家至夜半後明星出時諸天側塞虛空

勸太子去時等云云

太子瑞應經上紙九日至年十九四月八日夜天於窓中又手白言時可去矣等云云

摩訶摩耶經下紙四日及長大至十九便於中夜踰城而出云云

六度集經七紙三日至年十九太子都合諸妓凡千五百人共處一殿極其妓樂欲令疲

臥可得捨去太子靜思視諸妓人猶木梗人等云云

智度論三紙十七日我始年十九出家學佛道我出家已來已過五十年云云

般涅槃經下卷日須跋昔我出家十有二年道成得佛開説經法但五十載此モ亦十九

成佛ノ  
説ナリ

佛祖通載三紙二日一云諸部説十九出家三十成道中略有會十九出家五年事仙人行

樂行六年行苦行三十成道云云

#### 第二 廿五歳出家之説

佛祖統紀二十三紙日太子年二十五歳妙樂云法華文句會本第四第十四紙若十九出家

藏經二十五出家三十成道

荆溪之言有合於此

同卷十六日按瑞應因果本起大論并云十九出家十二遊增一中雜長四阿舍出囉經和須密論并云二十九出家當何所從今以如來八十壽除五十說法則定取梵網無相三昧寶藏經等三十成道之言若以三十成道除六年苦行則定取荆溪二十五出家上合寶藏之說若約前後義定則有二事可證一者出家之後六年苦行取成道之歲其數正合二者將出家時指妃服曰却後六年汝當生子後於成道之年果生羅睺按賢愚經云出家修道六年苦行得一切經未曾有經云太子遁至山澤勤苦六年得佛還國普耀經云父王聞太子得佛以來六年令優陀耶往請云闍別以來十有二年又云佛還國入宮坐羅雲來問訊群臣皆疑太子指國十有二年何從有子此等經文并約出家六年成佛又經六年還國逆而推之當以二十五為出家之年審矣孤山頌謂五歲遊歷此語無憑神智補註第五十備論異同請以荆溪之言為正文

右志盤ノ意ハ寶藏經ノ一文ニ依テ餘他ノ衆說ヲ棄ルモノナリ而シテ彼ノ寶藏經ノ一文ヲ取ル意ハ要スルニ在世說法ヲ五十年間ト定ムルカ故ニ成佛ノ年齡ハ三十歲ナラサルヘカラスト見込ミ成佛ノ年齡ヲ三十歲ナリトスレハ出家ト成佛ノ間ハ六年間ナルヲ諸經一致ノ故ニ太子出家ノ年齡ハ二十五歲ナラサルヘ

カラスト云ニアリ而シテ志盤ハ此ヲ以テ荆溪ノ定說ナルカ如クイヘリ然レトモ荆溪ハ法華文句記會本四十四ニ若佛十九出家乃成二十四得道若三十成道乃成二十五出家不同見別不須和會トイヘルノミ敢テ二十五出家ナリト斷定シタルニハ非ルナリ然ラハ出家ト成佛ノ間ハ六年間ナリト云コトハ頗ル確論ナリト雖モ出家ノ年齡ヲ二十五歲ナリト云フハ志盤一個ノ推斷ニシテ余ノ從ヒ得サルトコロナリ否誰人モ志盤ノ推斷ニ從フ者ハナカルヘキナリ

法華文句私記二十九檢經論則二十五出家依悲華經及善見律云云然ト余ハ悲華經善見律ノ中ニテ二十五出家ノ文ヲ見當ラサルナリ

### 第二 二十九歲出家之說

增一阿舍經三十五卷紙三曰世尊告曰我初學道時年二十九欲度人民故云云

長阿舍經四卷紙五曰我年二十九出家求善道須跋我成佛今已五十年云云

中阿舍經五十六卷紙七曰我時年童子清淨青髮盛年年二十九爾時極多樂戲莊飾遊行我於爾時父母啼哭諸親不樂我剃除鬚髮著袈裟衣至信捨家云云

雜阿舍經三十五卷紙五曰始年二十九出家修善道成道至於今經五十餘年云云

十二遊經曰佛以二十九出家以三十五得道云云

出曜經十三卷縮刷經曰二十九出家自云六年苦行中略年二十九出家求道云云

佛祖通載三紙二云亦有諸部及大乘說二十九出家三十五成道中略菩提流支引

經偈云八年作嬰兒七年作童子四年學五明十年受五欲六年行苦行三十五成道四

十五年中教化諸衆生眞諦及西域記並同此說云云菩提流支ノ偈大ニ精確ナルモノ、如シ

右ハ出家ノ異說ナリ中ニ於テ二十五出家ノ說ハ志盤ノ獨斷ニシテ他之ニ從フ者

ナキナリ十九出家ノ說ハ古來取ル者最モ多キナリ

歷代三寶記第一紙三曰若一十九出家三十五成道所可化物唯應四十五年而禪要經曰

釋迦一身教化衆生四十九年諸經多云十九出家今以此爲正云云法苑珠林第十八卷

紙三寶記ノ如ク評決セリ釋迦譜釋迦氏譜亦十九出家ヲ取レリ

ソモ太子ハ十九歳ノ出家ナルカ又二十九歳ノ出家ナルカ兩說一定セサルコトハ本

ト印度ニアルモノナリ故ニ西域記六十五紙曰出家時亦不定或云菩薩年十九或云二

十九ト然ラハ容易ク取捨スヘキモノニハアラサルナリ去ントモ研究ノ必要ハ考

決ニアルカニヘ試ニ此カ決斷ヲナサ、ルヘカラス此ニ依テ余ハ兩說ノ正否ヲ判

斷セントスルニツキ先ツ成佛ノ年齡ヲ定ムヘキナリ何トナレハ成佛ノ年齡定リ

マレハ准シ出家ノ年齡ヲモ推斷シ得ラル、カ故ナリ

然而ソ成佛ノ年齡ニハ兩說アリ

第一 三十歳成佛之說

梵網經過去現在因果經思惟無相三昧經本起經等

是也

第二 三十五歳成佛說

增一阿含經中阿含經雜阿含經出曜經悲華經等是

也

右兩說ハ佛祖通載三紙佛祖統紀二紙廿六

三大部補註五十二

法華文句私記二十九等

ノ中ニ指示スルトコロニシテ孰レモ皆其取ルトコロハ三十歳成佛ノ說ナリ釋迦

譜釋迦氏譜歷代三寶記モ亦三十歳ノ說ヲ取レリ而ソ此兩說モ亦印度ヨリアル所

ノ異說ナリ故ニ西域記八十二紙如來以印度吠舍佉日後半八日成等正覺中略是時如

來年三十矣或曰三十五矣トイヘリ然ラハ是亦容易ク取捨スヘキモノニハ非ルコ

ト思フヘシ法苑珠林十八紙ニ引ク空行三昧經ニ我年二十七得道トアレトモ恐ク

ハ誤認ナラン

上陳ノ如ク出家ノ年齡ハ十九歳ト二十九歳トハ兩說ト分レ廿五歳出家ノ說ハ其典

據ノ證文少ナク又流支異諦立辨等ノ傳ヘサルトコロナレハ採用スベキ價直之ナ  
 キヲ辨テ俟タスシテ知ルヘキナリ又成佛ノ年齢ハ三十歳ト三十五歳ノ兩説ニ分  
 ル而シテ十九出家ノ説ヲ取ルモノハ皆三十成佛ノ説ナリ二十九出家ノ説ヲ取ルモ  
 ノハ皆三十五成佛ノ説ナリ又外人ヨリシテ釋尊ノ傳記ヲ録スルモノハ皆十九出  
 家三十成佛ノ説ナリ唯般涅槃經釋尊涅槃三入ノトスル時須跋陀羅ニ對シテ自身  
 ノ歷經ヲ語リタマヘル文ノ譯語ハ皆二十九出家ト成レリ既ニ二十九ノ出家ト成  
 レハ成佛ノ年齢ハ三十五歳ナルヲ推シテ知ルヘキナリ唯智度論ヲ除ク  
 而シテ十九出家三十成佛ノ説ニ依レハ中間ニ十二年ヲ要スルヲト成レリ又二十九  
 出家三十五成佛ノ説ニ依レハ中間ニ六年ヲ要スルヲト成レリ此ニ由テ太子出家  
 ノ時ヨリ成佛ノ時ニ至ルマテ幾許ノ年數ヲ經タマヘルヲカト尋ヌルニ諸經諸論  
 一致シテ六年間ト定ムルモノ、如シ少シク其説處ヲ指示スレハ佛本行集經第二  
 八同第二十四丁十六同第二十八丁十五方廣大藏嚴經第七丁六普曜經第五丁三修行本起經  
 下卷丁十一太子瑞應經上卷丁十五過去現在因果經第二丁八中本起經下卷丁初大方便佛報  
 恩經第三丁二出曜經第七丁初大智度論第二丁六等付法藏傳第一丁十西域記第九丁七等凡ソ

經トイヒ論トイヒ傳トイヒ釋トイヒ至ルトコロニ太子ハ出家後ニ苦行  
 六年シテ成佛セリト云フ散見スレハ一一之ヲ舉示スヘカラスナルモノナリ  
 余ノ僅ニ異説ヲ見ルモノハ般涅槃經下卷ニ昔我出家十有二年道成トアルモノト  
 法苑珠林第十八丁歷代三寶記一丁ニ舉ル長阿含經ノ文ニ二十年外道中學トアル  
 モノトノ二文アルノミ但シ長阿含經ニ二十年トアルハ三十年ノ誤リニ第三十  
 然ラハ二十九ニ由リ出家シ其レヨリ第三十歳ノ初マテ外道ヲ訪問スレトモ太子ノ  
 意ニ通セサルニ由リ第三十歳ヨリ第三十五歳マテ前後六年間苦行シテ方ニ成佛  
 スト見レハ妨ト然ラハ多文ヲ以テ推ストキハ出家ト成佛ノ中間ハ六ク年ナリト  
 定ムベキナリ先ニ舉タル通載ノ中ニ有會十九出家五年事仙人行樂行六年行苦行  
 三十成道トイヒ孤山ノ頌文ニ十九出家六苦行五歳遊歷三十成說法度生五  
 十年是即共當八十壽ト云ヘル如キハ十九出家三十成佛ノ説ニ拘泥スルヨリ  
 オコル後人ノ想像説ナルノミ何ノ處ニカ樂行五年ヲ要ストイフ明文アリヤ其非  
 思フヘキナリ  
 已ニ中間ノ年限ハ六ク年ナリト定メテ見レハ二十九出家ニシテ三十五成佛ト云  
 説ニ從ハサルヘカラス十九出家三十成佛ノ説ニハ從フヲ能ハサルモノナリ何ト

カレハ十九出家ニシテ三十ノ成佛トスレハ中間二十二年間ヲ要スルヲト成ルカ  
 故ナリ判溪大師ノ推斷モ亦此ニアリ  
 問 若シ推斷ノ如ク三十五ノ成佛トスレハ前ニ断定セルカ如ク釋尊ノ壽命ハ七  
 十九歳ナリ然ラハ成佛已後説法ノ年限ハ四十五年間トナリ通常云トコロノ五十  
 九年説法トハ合セサルニアラスヤ  
 答 ト法顯傳<sup>三十</sup>紙<sup>三</sup>曰成佛在世四十五年説法教化ト又菩提流支ノ偈ニハ四十五年中  
 教化諸衆生ト然ラハ法顯并ニ流支ノ傳ルトコロハ四十五年間ノ在世説法トナレ  
 リ此ニ依テ之ヲ思フニ古來多ク佛ノ説法ハ五十年間ナリト云ヒ效ハセタルモノ  
 ハ其本ト十九出家三十成道八十入滅ノ説ヲ固執セルヨリ起ル後人ノ推按ニハア  
 ラサル乎イツレニシテモ既ニ確タル典據アレハ余ハ成佛已後四十五年間ノ在世  
 説法トナス者ナリ  
 説キ來レハ前ニ出セル智度論ノ文ト長阿含ノ文トヲ訂サ、ルニオラス智度論  
 ニ我始年十九出家學佛道我出家已來已過五十年トアル文ト長阿含ニ我年二十  
 九出家求善道須跋我成佛今已五十年トアル文トハ同一ノ原語ヲ翻譯セルモノ

ナルコトハ論ナキナリ果シテ然リトスレハ智度論ニ年十九トアルハ二十九ノ誤謬  
 ナラン何トナレハ凡ソ釋尊涅槃ニ入ントスル時須跋ニ對スル語ハイツレモ皆  
 二十九出家ト成ルカ故ナリ又長阿含經ニ我成佛トアルハ我出家ノ誤譯ナラ  
 ン何トナレハ既ニ二十九出家トイヒ今已五十年ト云カ故ナリ若シ二十九出家  
 ノ時ヨリ起算シテ五十年ニ至レハ釋尊ノ壽命ハ八十歳トナレトモ若シ經文ノ  
 如ク二十九ニ出家シ其ヨリ六年ヲ過テ成佛シ其成佛ノ時ヨリ五十年ヲ經タリ  
 トスレハ釋尊ハ八十六歳ノ壽命ヲ持テルト成ル然ルニ此事アルヘカラス是  
 テ以テ考ルニ我成佛トアルハ智論ノ如ク我出家ト改ムヘキナリ斯ク訂正シテ  
 見レハ二文同一致ノ語ト成リテ二十九ニ出家シ三十五ニ成佛シ七十九ニ入滅  
 シタルコト成リ

右ノ如ク断定スレハ南方佛教徒ニ傳ルトコロト一致ヲ見ルモノナリあるコト  
 ノ著ハセル佛教問答ノ中ニハ二十九歳出家三十五歳成佛トナセリ釋宗演君ノ著  
 ハセル印度佛教略史ノ中ニハ凡ソ三十三ニシテ出家シ三十六ニシテ成佛ストイハ  
 又獨逸人すふはどら氏ノ著ハセル佛教要論ノ中ニハ二十九出家苦行六年三十

五成佛、四十五年間說法、八十入滅トナレリ此如ク二十九歲出家、三十五歲成佛、四十  
五年間說法、七十九歲入滅トスレハ北方佛教ノ説ト南方佛教徒ノ傳ルトコロト説  
ノ一致ヲ見ルカ故ニ余ハ愈々以テ此説ノ正ナルヲ信スルモノナリ  
上來續陳シ來ル出生ト入滅ノ年代考ト又出家ト成佛ノ年齢考トヲ合セテ年代表  
ヲ造レハ左ノ如ク

佛 教 編 年 史

支那 周昭王第二十四年  
 出生年代 日本 紀元前二百九十六年  
 西洋 紀元前九百五十六年  
 支那 周昭王第五十二年  
 出家年代 日本 紀元前二百六十七年  
 西洋 紀元前九百二十七  
 支那 周穆王第六年  
 成佛年代 日本 紀元前二百六十二年  
 西洋 紀元前九百二十二年

支那 周穆王第五十一年  
 入滅年代 日本 紀元前二百十六年  
 西洋 紀元前八百七十六年

佛 教 編 年 史

右表ノ中ニテ現今ノ年表ニ合セサルハ出家ノ年代ヲ周昭王第五十二年トス  
 ルモノ是ナリ現今傳ルトコロハ周昭王ノ治世ハ五十二年トナス然レトモ周  
 平王元四年ヲ辛未トシ起算スルハ穆王壬申ハ第五十一年ト成ル穆王五十二年  
 ヨリ四十五年ヲ辛未トシ昭王ノ末年ナリ昭王ノ末年ヲ若シ五十二年トスレハ其廿  
 九年ノ前ノ甲寅ハ昭王二十三年ト成ル然レトモ昭王二十三年ニ佛出生ト説  
 ハ未タ之ナシ故ニ假リニ昭王ノ治世ヲ然レトモ昭王二十三年トシ表ヲ造ルモ  
 シ前ニ云ク如ク三代帝王ノ治世ハ其實分明ナラサルヲナシハ或ハ周昭王ノ治  
 世ハ五十二年間ナルカモ計リ知ルヘカラス  
 爰ニ於テ云ヘキハ古來佛教史ヲ語ルモノ皆佛入滅ノ年ヨリ起算セリ余ハ之ヲ其  
 當ヲ得サルモノトス余ハ編年體ニ佛教史ヲ編ントスルニハ釋尊成佛ノ時ヲ以テ  
 佛教史ノ紀元ト定ムヘキヲ至當ナリト信スルモノナリ若シ余ハ云フ如ク釋尊成  
 佛ノ年ヲ以テ佛教史ノ紀元ト定ムレハ當明治二十七年ハ吾佛教ノ紀元二千八百  
 十五年ナリト思ヘ

第四章 釋迦牟尼氏ノ成佛得道

釋迦牟尼世尊ハ六年苦行積テ二月八日ノ曉天ニ成等正覺セリ語ヲ換テイハ、盡



蒙ノ時ヨリ須臾モ止ムコトナク念頭ニ蟠マレル生死ノ大問題ヲ一朝ニ解釋シ終ル  
ト同時ニ自ラ生死ノ關係ヲ離斷シ盡セリ之ヲ名テ成佛トハ云ナリ  
果ソ然ラハ釋尊ハ如何ニ生死ノ大問題ヲ解釋シタル乎、又如何ニシテ生死ノ大關  
係ヲ離斷シタル乎、曰ク原因結果ノ理法ニ由テ此問題ヲ解釋シタリ禪定智慧ノ決  
斷ニ由テ此關係ヲ離斷シタリ、然ラハ如何ナル原因結果ノ理法ヲ見出シテ此問題  
ヲ解釋シタル乎ト云ニ凡ソ吾人ノ境遇ヲ見レハ或ハ苦シムアリ或ハ樂シムアリ  
或ハ泣キ或ハ笑フ又其身軀ノ構造ヲ見ルモ其心意ノ發動ヲ見ルモ實ニ奇々怪々  
ニシテ又千態万狀ナリ抑モ此ノ如キ現象ハ他ニ造物主若クハ差排者ト云ヘキ干  
渉者アルニ由ルモノ乎、否然ラス此ガ原因ヲ客觀的ニ求ムヘカラス主觀的ニ求ム  
ヘキナリ其原因ナクシテ自然ニ此ノ如キ現象ヲ見ルニアラス又他ニ造物主若ク  
差配者ト云ヘキ者アリテ彼レ能ク此諸現象ヲ呈スルニモアラス吾人各自ノ手元  
ニ其原因ハアルモノナリトノ解釋ヲ下シタリ  
然ラハ何者乎吾人ノ手元ニアル原因ナル乎曰ク煩惱ト造業是ナリトス凡ソ吾人  
ハ曾テ、ナカリシ者ガ今方ニ出來タルニアラス又死物の無機的ノ化シ活物の有機

的ト成レルニモアラスナリ過去既ニ然ルカユエ未來モ亦死スレハ無ニ歸スル  
ニアラス又有機的ノ活物が轉シテ無機的ノ死物ト成ルニモアラスナリ要スル  
ニ吾人ハ無始ノ存在ナルト共ニ無終ノ活物ナリトス然リ無始無終ノ活物ナリト  
雖モ一定不變ナルニアラス恆ニ生滅無常變々化々スルモノナリ語ヲ換テイハ、  
前滅スレハ直ニ後生スルモノナリ其前滅後生ニ就テ大ナル一生一期ノ前滅後生  
アリ小ナル時々尅々ノ前滅後生アリ大ト小ノ前滅後生アリト雖モ前滅スレハ必  
ス後ノ生シテ止マサル所以ハ自己ノ煩惱ト造業ニ由ラサルハナシ今姑ク大ノ前  
滅後生ニ就テイハ、ナカ抑モ吾人ノ生ルト云ハ曾テ死シタル者ノ更ニ生レタルモ  
ノナリ之ヲ喻ルニ新タナル年ノ元日ト云ハ舊キ年ノ終ル後ノ日ナルカ如シ故  
ニ吾人此一生間ノ禍福万般ハ過去即チ前生ニ於ケル自己ノ煩惱ト造業ノ勢力ニ  
由ルモノナリ各自ノ過去世ニ於ケル煩惱ト造業ノ一様ナラサルニ由テ各自ノ現  
在世ニ於ケル禍福ハ万端ト分ル、ナリ其煩惱造業モ万般ニ分レ其禍福吉凶モ万  
端ニ分レトモ現在世ニ見ルトコロノ結果ハ過去世ニ於ケル主觀的自己ノ原因ニ  
由ルモノナリト云フハ人生一般ナリ

之ヲ要スルニ煩惱ヲ發シ業ヲ造ルカ故ニ生ル、生ルカ故ニ復煩惱ヲ發シ業ヲ造ル、復煩惱ヲ發シ業ヲ造ルカ故ニ復生ルト云ハ生死ノ問題ヲ解釋スル綱領ナリ之ヲ名ヲ感業苦ノ三道トイヒ或ハ苦集二諦ト説キ亦ハ十二因縁ト説ク(十二因縁并ニ苦集二諦ノ一ハ他日列講スヘシ)

而ノ釋尊ハ如何ニシテ此生死ノ關係ヲ離斷シタル乎ト尋ヌルニ前ニ云如ク禪定ト同時ニ得ル智慧ノ決斷力ニ由テ此關係ヲ離斷シタリ其禪定ト云ハ水ノ湛然トシテ動搖セサルカ如ク心意ヲ靜カニ沈メテ專ラ眞理ノ一方ニ注クモノ是ナリ其智慧ト云ハ禪定工夫ノ結果トシテ得タル理非理ノ判斷力是ナリ此禪定ニ由テ得タル智慧ノ判斷力ハ能ク釋尊ヲシテ生死相續ノ關係ヲ斷絶セシメ生來ノ宿志ヲ満足セシメタリ

然ラハ如何ニシテ此智慧ハ生死ノ關係ヲ斷絶スルヲ得タル乎曰ク前ニ云如ク生死相續スル所以ハ煩惱ヲ本トシテ種々ノ業ヲ造ルニ由ル故ニ煩惱止ミヌレハ隨テ造業モ息ム造業息ミヌレハ再ヒ生レントスルモ生ル、ト能ハス再ヒ生ル、トナケレハ又再ヒ死スルトモナシ爰ニ於テ生死ノ關係ハ方ニ斷絶スト云モノナ

リ是ヲ以テ生死相續ノ關係ヲ斷絶セントスルニハ第一若ニ煩惱ヲ止息セサルヘカラス而ノ煩惱ト智慧トハ恰闇ノ明ニ於ケルカ如ク彼此相反セリ智慧ノ明モシ一段進メハ煩惱ノ闇ハ隨テ一段退キ更ニ智慧ノ明ヲシテ二段進マシムレハ煩惱ノ闇ハ隨テ二段滅スヘキハ數ノ見易キモノナリ果シテ然ラハ釋尊禪定ノ結果トシテ眞理ヲ徹見スル最超最勝ノ智慧ヲ發得シタマヘルト同時ニ一方ニアリテハ眞理ニ昏キ煩惱ノ迷夢ハ凡テ斷滅セリト云フ思フヘシ然リ智慧ノ發得ト同時ニ諸種煩惱ノ迷夢凡テ斷滅セルカ故ニ種々ノ造業モ亦隨テ止ム種々ノ造業止息スルカ故ニ再ヒ未來世ノ生ヲ引クヲ再ヒ未來世ノ生ヲ引クヲナキカ故ニ復來世ノ老病死モアルヘキ筈ナシ爰ニ於テ方ニ生老病死ノ關係ハ斷絶セリ生老病死ノ關係ヲ斷絶セシトコロハ即チ成佛ト云モノナリ(此旨ヲ詳ニセントスルニハ四諦十二因縁ト云フヲ委クセサルヘカラス然レトモ其ハ此ニ述スヘキ閑ナシ)

第五章 釋尊說教ノ順序經歷

佛教紀元第一年二月十六日即チ成佛後一七日間ヲ經テ方ニ大方廣佛華嚴經ヲ説ク

十地經論一紙初婆伽婆成道未久第二七日、在他化自在天中、下略華嚴經探立記二紙十此經定是第二七日所説云云以テ知ルヘシ釋尊ハ二月八日ニ成佛シテ一周間ヲ過タル後ノ七日間即チ二月十六日已後ノ説法ナルヲ但シ此ニハ異説紛々タルヲナリ其ハ探立記二紙十法華立義稱籤十之上七十等ニ多説ヲ引ク参考セヨ又法華經ノ譬喩品ヲ見レハ我始坐道場觀樹亦經行於三七日中思惟如是事我所得智慧微妙最第一ト言ヘリ因果經第三ノ如キモ成佛ノ初メ三七日間ハ思惟シテ説法セサルモノ、如ク説ク此ハ如何ナル譯アル乎ト云ニ法華文句記十三紙二刑溪釋シテ大小分途、小見三七停留大觀始終無改トイヘリ其意ハ初メ三七日間ニ説法アルヲナシ只思惟スルノミト云モノハ小乘教ニ依ル又三七日中ニ於テ已ニ説法アリト云モノハ大乘教ニ依ルトナリ斯ク小乘ヨリ論セハ説法ナシ大乘ヨリ論セハ説法アリト云ニハ深意アルヲナントモ今之ヲ盡シ難シ

同年二月三十日即チ釋尊成佛後凡ソ三七日間ヲ經テ將ニ成佛ノ土地(摩揭陀國)ヲ發シテ波羅奈國ノ鹿野園ニ趣カント途中ニ商人ノ提謂ト波利ノ二人ニ提謂經ヲ説ク因果提謂經ト云ハ今傳ヲサレトモ要スルニ三歸五戒ヲ説テ提謂ト波利ヲ化スルニアリ是即チ世善人天教ナルモノナリ統記三廿ミルヘシ同年三月八日ヨリ波羅奈國ノ鹿野園ニ於テ凍如頰釋跋提十力迦葉摩男俱利ノ五人ニ對シ始メテ小乘教ヲ説ク因果四部ノ阿含經ト云ハ此時ノ説法ヲ結集シタルニ相違ナクシトモ唯此時ノ説法ニ限ルトト思フヘカラス阿含經ト云ハ通ノ釋迦ニ説ケル小乘經ノ部分ヲ集メタルモノナリ若シ十二遊經ニ依レハ一年間ハ成佛ノ地ヲ去ラス成佛ヨリ第二年日ニ至リ波羅奈國ニ移リテ方ニ説法ストイヘリ又普曜經七三四分律三十一五同四十一九紙九分律十五七同卷十五智度論五十七四紙等異説アレトモ今ハ智者大師ノ考決ニ任セテ因果經ノ説ヲ用ユ請フ法華立義釋籤十之上七十紙法華文句記十三二等ヲ見ルヘシ

問 右波羅奈國ノ鹿野園ニテ説教開席セシ後ノ經歷ハ如何  
 答 其經歷ハ詳ニ知ルコトヲ得サルモノナリ其詳知シ難キ所以ハ支那譯ノ一切經  
 ト云ハ釋尊一代ノ説教ヲ盡ク譯書シタルモノニアラス又其經歷ヲ詳記シタル書  
 ヲ傳ルコトモナシ故ニ釋尊一代説教ノ經歷順序ハ詳カニ知リ難シトスルヲ至當ト  
 ナス獨リ十二遊經ニ説教ノ經歷順序ヲ略記スレトモ其ハ僅ニ初メ十二箇年ノ略  
 記アルノミ其後ノコトハ記サス實ニ遺憾ノ至リナリ

然ルニ天台宗ノ學徒ハ多ク佛祖統紀ノ第三卷并ニ四教儀集註上紙ニ出ル阿合十  
 二方等ハ二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇二〇  
 初ノ十二年間ハ阿合經即チ唯小乘教ノミヲ説キ次ノ八年間ニ方等部ニ屬スル維  
 摩經楞伽經思益經寶積經大集經ノ如キヲ説キ次ノ二十二年間ニハ都テ般若部ニ  
 屬スル説教ヲ爲シ後ノ八年間ニ於テ法華經并ニ涅槃經ヲ説クト定メ佛ノ説教ハ  
 前後五十年間ナリトス然レトモ此ハ後人ノ云トコロニシテ天台宗ノ開祖智者大  
 師ノ説ニハアラサルナリ智者大師ハ釋迦ノ説教ニ華嚴阿合方等般若法華涅槃ノ  
 五大時期アリテ其順序ヲナセリト云フハ論定シタレトモ年數ニ於テハ定論ナキ

モノナリ即チ方等部ノ年數ノ般若部ノ年限ニハ定論ヲナサハルナリ請フ法華玄  
 義第十卷ヲ披テ之ヲ知レ且ツ夫レ智者大師ハ五時ノ順序ヲ立ルニ就テモ別ノ五  
 時ト通ノ五時ヲ分テ論セリ然ルニ後學ノ徒ハ別ノ五時ニ拘ラレテ通ノ五時ヲ知  
 ラサルモノ、如シ此ニ依テ明ノ智旭ハ楞嚴經玄義ノ中ニハ今人僅讀一本四教儀  
 輒執別五時止是竊取迦葉領解餘延ト駁シ又教觀綱宗會釋ノ中ニハ前ニ法華玄義  
 第十卷ノ文ヲ擧テ次ニ智者章安明文若此今人絕不誦目尙自訛傳阿合十二方等八  
 之妄説爲害甚大ト斥セリ又風潭ノ四教儀集註增暉記一紙ニモ多説ヲ擧テ年限  
 ノ一定スヘカヲサルコト彰ハセリ之ニ依テ之ヲ觀ルニ五時ノ年限セサルコト思フ  
 ヘシ

夫レ古代ノ高僧中ニ佛敎ヲ時間的ニ分類スルコトハ智者大師ノ右ニ出ル者恐クハ  
 ナカルヘシ而シテ智者大師尙以テ年限ヲ一定セズ此ニ由テ知リ又釋尊説教ノ順序  
 經歷ハ詳知スヘカヲサルコト推テ辨スルハ贅論ナリ故ニ説教ノ經歷ヲ辨スルコ  
 トハ此ニテ止ムヘシ又之ニ依テ知リ又釋尊説法ノ年限ハ必シモ五十年間ニアラス  
 恐クハ余ノ前ニ云知ク三十五ノ成佛ニシテ四十五年間ノ説法ナルヘシト云フテ

伏ノ學者ハ批評ヲ俟テ三十...

第六章 釋迦牟尼佛入滅ノ事蹟

前述ノ如ク釋迦牟尼佛ハ三十五歳ニシテ佛陀ノ覺位ニ昇リ四十五年間説法利  
生ホコタルヘトナク七十五歳ニ當ル年ノ二月十五日ニ入滅セリ而シテ釋尊ハ自身入  
滅ノトヲ豫シメ知レルモノ、如シ即チ四童子三昧經下三法滅盡經初佛所行讚五  
丁五統紀四五ニ舉ル觀音菩薩行法經等ニ依レハ入滅ノ時ヨリ三月月前ニアリテ  
是ヨリ三日ノ後ニ至レハ吾レ當ニ涅槃スト云テ弟子輩ニ告示セテ以テ且ツ  
入滅ノ當日ニ至レハ早朝ニ大音ヲ發シテ自ラ方ニ涅槃ニ入ルヘキヲ衆ニ告タ  
リ此ニ依テ弟子輩并ニ國王大臣庶民皆集リ來テ之ヲ悲ミ佛ノ自在力ヲ以テ尙  
暫ク命ヲ留メテ請願スルヲ頗ル切ナレトモ釋尊ハ其請ヲ容レズ弟子輩ノヲメ  
ニ四十五年間ノ説法ヲ追説セリ之ヲ編輯シタルモノヲ大般涅槃經三十五卷ト云  
フ智者大師ガ涅槃經ハ追説追法ノ結經ナリトイヘルハ此意ナリ又弟子輩ニ對シ  
愚勸ニ滅後ノ行狀ヲ誠ニ述マベリ之ヲ編輯シタルモノヲ佛遺教經一卷ト名ク又  
阿難ノ問ニ應ジテ葬式ノ始末并ニ追弔ノ仕方及ヒ一代ノ説教ヲ編輯シテ後代ニ

留ムル結集ノ方法等ニ至ルマテヲ具サニ教示セリ(是等ノ事ヲ編輯セルモノハ後  
分涅槃經二卷是ナリ)此ノ如ク釋尊ハ入滅ノ當日ニイタルモ早朝ヨリ深夜ニ及フ  
マテ説教ヲナシ且ツ遺言ヲナシ深更途ニ頭北面西右脇ニ臥シタマヒテ聲ヲ止ム  
ト同時ニ入滅涅槃セリ  
而シテ釋尊ハ何ノ地ニテ入滅シタマヘル乎ト尋ルニ西域記六十六ニ玄奘自ラ經  
歴シテ記錄セルカ如ク中印度國ノ拘尸那揭羅國ニアリテ入滅シタマヘルナリ釋  
尊ノ方ニ入滅セルヤ拘尸那揭羅國ノ全國ハ上下等シク之ヲ惜ミ老幼同シク之ヲ  
悲ミ號哭哀歎ノ聲ハ天地ヲ動スバカリノ情况ナリ釋尊ノ入滅ヲ傷ムト共ニ帝  
王大臣貴族庶民ヨリ香木香華燈火等ヲ持來リテ釋尊ノ遺骸ニ供養スルヲ最モ多  
ク殆ト山ヲ築ク程ノ勢ヒナリキ既ニ全國ノ人民ハ釋尊ヲ思フ志ノ切ナルガタメ  
已テ忘レテ葬具葬費ヲ供養シ來ルカ故ニ金銀玉珠ヲ以テ棺ヲ造リ香木ヲ以テ高  
臺ヲ築キ佛棺ヲ其高臺ノ上ニ按シテ香華燈明ノ供養ヲナスコト一七日間ナリ實  
ニ其勢況ハ帝王大臣トイヘトモ遠ク及ハサルモノ、如ク記セリ  
已ニ一七日間ノ供養オハリテ二月二十二日ニ至レハ嚴重極マル葬儀ヲ行ナヒテ

佛身ハ火葬トナセリ蓋シ火葬ハ釋尊ノ遺命ニ從ヘルモノナリ而シテ其火葬シ火  
 ハ一七日間滅セザリト云 何故ニ其火ハ一七日間モ滅セザリシカト云ニ全國  
 ヲリ運般シタル葬具物品ノ多キニ由ルモノナリ佛般泥洹經下卷ニハ左ノ如ク云  
 ヘリ栴檀香薪檀香薪梓薪著棺上下四面高廣各三十丈ト又迦葉結經ノ中ニハ  
 廣所喪具方百由旬トイヘリ以テ知ルヘシ集リ來ル葬具類ノ莫大ナルヲ又之ヲ  
 以テ推シ知シ火ノ長ク消滅セザルヲ此ニ由テ出棺送葬ノ日ヨリ又一七日間ヲ  
 歷テ二月二十九日ニ至リ舍利ヲ收メタリトス即チ納骨式ハ葬儀ノ日ヨリ一週後  
 ニナセリトナリ  
 右釋尊遺族ノ葬式モオハリ納骨モオハルヤ拘尸那國ノ帝王ハ其納メタル釋尊ノ  
 舍利ヲ以テ世界無比ノ重寶トナセリ之ヲ世界無上ノ寶物トナスカ故ニ將ニ國中  
 ニ大工事ヲ起シ大塔ヲ築テ之ヲ祭り人民一般ニ敬禮セシメントス故ニ先ツ全國  
 ノ兵士ニ命シテ舍利シ在所ト國ノ境界ヲ嚴ニ守ラシム蓋シ外邦ノ掠奪アラソ  
 ヲ恐レテナリ時ニ摩竭陀國迦毗羅國等ノ隣邦スナハチ七大國ノ帝王ハイツレモ  
 拘尸那國ニアリテ釋尊ハ入滅シタマヘリト云フヲ聞クト同時ニ或ハ帝王ノ自

ラ來ルアリ或ハ使者ノ來ルアリテ釋尊ノ入滅ヲ弔ヘリ七大國ヨリハ釋尊ノ入滅  
 ヲ弔フト共ニ舍利ノ幾分ヲ配賦アラソトテ請求セサルハナシ各國イツレモ之ヲ  
 請求スルヲ最モ切ナリ然ルニ拘尸那國ノ方ハ其請求ヲ拒ンテ少分ノ配賦モ許容  
 セス益シ兵士ヲシテ舍利ヲ嚴ニ守衛セシム由テ此レ強ク拒メハ彼レ求ルヲ愈々切ニ  
 シテ終ニ七大國ハ兵力ヲ以テ舍利ヲ爭ハントスル場合ニ立至レリ時ニ一人ノ婆  
 羅門アリ一人ノ名稱ハ異説多シ後分涅槃經ニ性煙ト云處胎經ニハ優婆吉ト云法  
 丁ニハ直性ト云實ニ事ハ頗ル大事ニ及ハントスル景況ヲ見テ八國ノ中ニ立チ入  
 リ大ニ周旋スルトコロアリ八國ニ説テ以テ八國ノ兵ヲオサメシメ舍利ヲ八分  
 トナシ八國ニ分賦スルコトナセリ(其遺跡ハ西域記六丁ニ出ル)爰ニ於テ八國ノ  
 爭ヒハ止ミ八國孰シモ釋尊ノ舍利ヲ得テ喜フコ限リナク各々自國ニアリテ美麗  
 極ハマル塔ヲ建築シタリ  
 又八國ノ中ニ立テ舍利ノ分配ニツキ周旋シタル婆羅門ノ一人ハ舍利ヲ計リ分タ  
 ル瓶ヲ得テ之ヲ土中ニ埋メ其上ニ大塔ヲ建築セリ且ツ釋尊ヲ葬リタル土地ノ人  
 民即チ畢婆羅村ノ人民ハ餘殘ノ灰ヲ得テ之ヲ土中ニ埋メ其上ニ一塔ヲ建テタリ

爰ニテイテ印度國中ニ十個ノ大塔出來タリ

已上陳ルトヨロノ釋尊入滅ノ事蹟ヲ知ント欲セハ統記四丁已下ニ多經ヲ引用ス

ルヲ見ルヘシ更ニ之ヲ委クセント欲シ人ハ藏中ノ小乘部ニ屬スル佛般泥洹經二

卷 白法祖譯 大般涅槃經三卷 法顯譯 佛說方等般泥洹經二卷 失譯 并ニ大乘經ノ涅槃

部ニ屬スル大般涅槃經後分二卷 唐代若那跋陀羅譯 佛說方等泥洹經二卷 西晉竺法

護譯 四童子三昧經三卷 隨闍那彌多譯 大悲經五卷 唐代那連提耶舍譯 等ヲ披テ知レ

釋尊ノ傳記ニ關スルモノトイヘトモ佛本行經ト佛所行讚ノ中ニ入滅ノ時ノ記事

アルノミニテ他ノ大莊嚴經普曜經瑞應經等ノ如キハ成佛ノ時ノ記事ニテ終レリ

卷數ノ最モ多キ本行集經トイヘトモ釋尊ガ成佛シテ後鄉國ニ歸リテ父王ヲ親戚

ノ旨ニ對シ說法シタマヘル事ニテ終レリ茲ニ一言ヲ要スルコトハ讀者諸君ハ右記

ストユラテ見テ釋尊在世ノ時ノ德望如何ヲ想像ヲランコト是ナリ

第七章 釋迦牟尼佛說教ノ結果

論語ハ孔子ノ自筆ニアラス孟子亦孟軻ノ自筆ニアラス皆其門弟輩ノ手ニ成レル

モノナルカ如ク凡ソ佛典ハ釋尊ノ自筆ニアラス皆弟子ノ手ニ成レルモノナリ釋

尊ノ滅後ニ至リ弟子相寄テ釋尊在世ノ時ニ於ケル說教ヲ編輯シ記錄スルヲ名ケ

テ結集トイフ而シテ其結集ニ經ト律ト論ト三部門アリ故ニ之ヲ經律論ノ三藏結

集トイフ又其結集ニ四回アリ第一回ハ釋尊入滅ノ年ノ四月十五日ヨリ同年七月

十五日ニ至ル間ノ結集是ナリ第二回ハ釋尊入滅後將ニ一百年ニ及ントスル頃

ニ吠舍釐國ノ耶舍陀ナル者長トナリテ七百名ヲ集メ律藏ノ一部ヲ結集セルモノ

是ナリ第三回ハ釋尊ノ入滅ヨリ一百有餘年 此年代ハヲ過ル頃ニアタリ中印度ノ

摩迦陀國ニ出テ、其威勢強大ヲ極メタル阿育王ノ力ニ由リ目犍連子帝須會長ト

ナリテ三藏ヲ結集スルモノ是ナリ第四回ハ釋尊ノ入滅ヨリ凡ソ四百年ヲ過タル

頃ニ北印度境ノ健陀羅國ニ出タル迦膩色迦王ノ力ニ由リ五百名ヲ集メテ小乘有

部宗ノ三藏ニツキ大編輯ヲナスモノ是ナリ 西域三十六 事跡出ル

右四回ノ結果アル中ニ於テ今ハ第一回ノ結集ヲ示サントス其第一回ノ結集ニ付

テ又兩會開ケタリ一ヲ闍內上坐ノ結集ト名ケ他ノ一ヲ闍外大衆ノ結集ト名ケ此

二會結集ノ事跡ハ西域記九三 慈息傳三十六等ニ出タリ更ニ委ク尋ントスル者ハ選

集三藏及雜藏傳一卷迦葉結經一卷並ニ大智度論二丁已下ト同第一百卷 二十四分

律第五十四卷丁巳下五分律第三十卷丁巳下僧祇律第三十卷一紙丁巳下阿育王經第六卷大乘法苑義林章二本丁巳下對見スヘキナリ此ニハ頗ル其異說アリテ事容易カラサントモ今ハ其大方ヲ示スヘキナリ請フ先ツ彌内上坐ノ結集ヨリイハン先ツ結集ノ場處ニ就テ(一)西域記九五法顯傳二十宗輪疏四丁等ハ摩竭陀國王舍城ノ北門ノ外ニアリテ會ヲ開クモノトシ(二)智度論三七三論玄義七丁付法傳一丁等ハ王舍城内ノ耆闍窟山ニアリテ會ヲ開クモノトス兩方説テ異ニスルカ如シトイヘトモ智度論ノ方ハ王舍城北門ノ外ト云ハ耆闍窟山ニ隣接スルカ故ニ其總山ヲ舉クモノナリ又西域記法顯傳ノ方ハ正シク其會場ノ土地ヲ示シタルモノナリト云ハ三論玄義檢幽鈔五十四ノ意ナリ

又結集ノ爲メ會同シタル人員ニ就キ西域記智度論慈息傳三十六四分律四十五等ハ一千人集マレトナシ撰集三藏及雜藏傳ハ八十千人集マレトナシ迦葉結經ノ他菩薩處胎經五六五分律三十丁初僧祇律三十二一紙阿育王傳第六付法藏傳一十部執疏義林章ニノ如キハ五百名ノ會同トナス斯ク異說アリト雖モ五百名ノ會同ト云テ以テ正トスヘシ一千人ノ會同アリト云ハ參列者全體ノ人數ヲ示スモノナラン又八千人ノ會同アリト云モノハ信シ難シ或ハ彼ハ關外大衆部ノ會同者ヲ云モノナル乎タヒト之ヲ人數ヲ定メサル關外數ヲ説クトスルモ八十千ト云フハ聊カ信シカタキモノナリ

而ノ此結集ヲナスニツキ迦葉ハ發起者トナリ又會ノ總理者トナリシヨハ諸說一定セリ但異說ノアルハ經律論ノ三藏ノ中ニテ誰カ經ヲ集メ誰カ律ヲ集メ誰カ論ヲ集メタルカト云フニ就テハ異說多端ナリ要スルニ經律論ノ三藏ヲ分擔シテ結集セシモノト見ユル其分擔ニツキ各分擔ノ長者即チ主任職ヲ勤メタル者ニツキ異說ノアルコナリ然リト雖モ余ヲ以テ之ヲ考ルニ分擔スルト共ニ亦互ニ補助シ互ニ合議スルト云フモ理トシテアルヘキコナリ此ニ依テ異說ヲ生セシモノナラソイツレニテモ結集綱裁ノ事務ハ滅後ノ佛教ヲ釋尊ヨリ付屬セラレタル迦葉之ヲ勤メ又結集即チ釋尊ヨリ親聞シタルコトヲ記錄スルコトノ主役者ハ阿難之ヲ勤メタルニ相違ナキナリ(異說ヲ示スフハ省ク)

六三〇

右結集會同ノ時日ハ四月十五日ニ始マリ七月十五日ニ終ルト云フト又其費用ヲ負擔シタル施主人ハ摩竭國ノ大王阿闍世其人ナルコトハ諸說一致シテ異論ナキ



モノ、如シ其ハ前ニ列テル書籍ヲ披テ知ルヘキナリ  
次ニ願外大衆部ノ結集ヲ示サハルヘカラス然レトモ事冗長ニ亘ルヲ以テ其ハ省  
略セントス請フ志アル諸君ハ西域記五四十三論玄義八丁十大乘法苑義林章三本等  
ヲ披キ尋テヨ此結集ニ就テハ論スヘキト頗ル多クテモ其ハ余近日發刊スル佛  
教史林ノ中ニ於テ他日委ク論スルコトアルヘキナリ

第二期 佛教一致ノ時節

上來説來ル如ク釋迦牟尼佛ハ印度國ニ出現アリテ廿九歳ニ出家シ三十五歳ニ成  
佛シテ四十五年間説教シ七十九歳ニシテ入滅シタマヘリ其入滅ヲ見ルヤ迦葉阿  
難等ノ盡力ニ由テ釋尊一代ノ説教ハ忽チニシテ貝葉ニ編輯セラレタリ余ハ此間  
ヲ試ミニ釋迦牟尼佛開教ノ第一期トハナセリ  
是ヨリ第二期トスルハ釋尊ノ入滅アリテ其説教ヲ結集スルニ就テハ上坐部大衆  
部ト兩派ニ分レタレトモ釋尊ノ入滅ヨリ凡ソ一百餘年間ハ佛教徒和合シテ宗派  
分出ノ形跡ハ之ナキモノナリ故ニ未タ宗派ノ分出ヲ見サル間ヲ佛教一致時代ト  
名ケタリ是即チ佛教紀元第四十六年ヨリ凡ソ一百有餘年間ト見ルヘシ此一百餘

年間ト云モノハ佛教徒タ、道德ヲ堅ク守リテ教理ノ諱論ト云モノハ一向ニ之ヲ  
キコト見エタリ但シ佛教徒ノ一致和合シテ道心堅固ナルハ釋尊ノ餘徳トハ云モ  
ノ、亦以テ管理者ノ高德ニ由ラスンハアルヘカラス然レハ誰カ此間ノ管理者ト  
ナリタルカ曰ク迦葉、阿難、商那和修、末田地、優婆塞多ノ五人是ナリ此五人ハ前後繼  
續シテ佛教ヲ總理シタル人ナリ依テ之ヲ滅後傳燈ノ五師ト稱ス 同世ノ五師ト異  
今ハ異世ノ五師ナリ同 世ノ五師アル中  
初メ釋迦牟尼佛ノ入滅ニ臨ミタマヘルヤ滅後ノ佛法ヲ迦葉ニ附屬セリ(涅槃經會  
疏二百二ニ出ル)迦葉ハ佛ノ遺命ニ依テ佛滅後凡ソ二十年餘間ハ佛法ヲ總理シタ  
リ迦葉ハ二十年餘間佛法ヲ總理シ後之ヲ阿難ニ附屬シテ滅セリ阿難ハ迦葉ノ後  
ヲ繼キ亦凡ソ二十年餘間佛法ヲ總理シ後之ヲ弟子ノ商那和修並ニ末田地ニ附屬  
シテ滅セリ商那和修ト末田地ハ阿難ノ後ヲ繼テ佛法ヲ管理スルコト亦凡ソ二十餘年  
間ニ及ヘリ而シテ後商那和修ハ佛法ヲ弟子ノ優婆塞多ニ附屬シテ滅セリ此ノ如ク  
第四ノ末田地ハ第三ノ商那和修ト同時代ノ人ナレトモ右ノ五人ヲ通シテ異世ノ五  
師ト名ク此五師世ニアリテ佛法ヲ管理スル間タハ印度ノ佛教一致シテ更ニ異論

アルナカリシナリ但シ右五師ノ佛法ヲ相傳ルニ付テ頗ル要論アルナリ請フ  
問答ヲ以テ左ニ少シク之ヲ辨セシ

問 右ノ五師ガ傳ヘタル佛教ハ小乗カ將カ大乘カ

答 小乗佛教ナリ其ハ五師ノ行蹟ニ就テ見レハ明著ナリ

問 然レハ右ノ五師其人ハ大乘佛教アリト云フヲ知ラサル乎或ハ之アリトス  
ルモ五師自ラ信セサル乎

答 五師其人ハ大乘佛教アリト云フヲ知リ且ツ信シタル者ナリ殊ニ迦葉阿難ノ

如キハ釋尊ヨリ直ニ大乘佛教ヲ聽聞シタル人ナレハ大乘ヲ知リ且ツ信シタル  
ハ言テ俟サルモノナリ

問 果シ然リトスレハ右ノ五師ハ何故ニ小乗佛教ノミテ弘メテ大乘佛教ヲ弘メ  
サル乎

答 賢者ノ説默ハ時ヲ待チ人ヲ待ツ弘法大師例セハ釋尊ノ本服ハ大乘ニアリト  
イヘトモ初メ十二年間ハ唯小乗ヲ説テ大乘ヲ説キタマハサルカ如シ蓋シ是レ大

乗ヲ説クヘキ時未タ來ラサルカ故ニ釋尊モ初十二年間ハ小乗ノ説ヲ爲シタマヘ

ルモノナリ釋尊尙以テ然リ况ヤ迦葉阿難等ノ弟子輩ニテイテヤ迦葉阿難等モ  
自己ノ安心ハ大乘ニアリト雖モ其時代ヲ考察スルニ大乘ヲ弘ムヘキ時機ニアラ  
サルカユエ顯露ニハ小乗ヲ弘メテ大乘ハ隠セルモノナリ然ルニ馬鳴龍樹等ノ時  
代ニナレハ方ニ大乘ヲ講スヘキ時機至レルユエ彼ハ舊テ大乘ヲ顯揚シタマヘリ  
例セハ釋尊モ十二箇年ノ後ニ至リ方ニ大乘ノ説法ヲナシタマヘルカ如シ  
問 釋尊ガ初ハ小乗ヲ説キ後ニ至リテ大乘ヲ説ケルコト前後同一ノ人ヲ教導ス  
ルニアルカユエ之ヲ教育ノ方法ヨリ考ルモ又人智ノ發達スル順序ヨリ考ルモ左  
モアルヘキコトイハサルヘカラス然ルニ釋迦ノ入滅ヨリ凡ソ五百年間ハ大乘ヲ  
説クヘカラサル時代ナリ故ニ五師ノ如キハ唯小乗ヲ弘メタリ又釋迦ノ滅後凡ソ  
六百年ヲ過タル頃即チ馬鳴ノ出テタル頃ヨリハ大乘ヲ弘ムヘキ時代ナリ故ニ馬  
鳴龍樹ノ如キハ大乘ヲ擴張セリト云フ意得カタシ抑モ此ノ如キ時代ハ誰カ惹起  
シタリトスル乎

答 余誠ニ佛教ノ内部ヨリシテ此ガ答辨ヲナサシカ抑モ佛法ハ大ニ分レテ四種  
ト成ルモノナリ曰ク教理行果ノ四種是ナリ其教トハ釋尊ノ遺教ニシテ即チ一切

經ナルモノ是ナリ其理トハ前ノ教ニ依テ説キ顯ハサルハモノ是ナリ其行トハ前ノ教ト理ニ依テ説ノ如ク身ニ實行スルモノ是ナリ其果トハ實行ノ因ニ依テ得ルトコロノ結果ニシテ謂ユル聲聞緣覺佛陀ノ證是ナリ而シテ釋迦ノ滅後凡ソ五百年間ヲ正法ノ世ト申シテ此間ハ教理行果ノ四種ヲ具足セルモノトス此ヲ過テ後ノ一千年間ヲ像法ノ世ト申シテ此間ハ教理行ノ三種ハアレントモ已ニ第四ノ果ヲ欠少セルモノトス此ヲ過タル後ハ末法ノ世ト申シテ教ト理ノ二種ハ留ントモ行ト果ハ欠乏スヘシトハ釋尊ノ未來記ナルモノナリ此ニ依テ之ヲ見ルニ馬鳴ノ未タ出サル已前ハ得果ヲ事トスル時代ナリ馬鳴ノ已ニ出タル頃ハ修行ヲ要スル時代ナリトイハサルヘカラス凡ソ佛教ハ何ノ時ト何ノ教ニ係ラス皆修行ト得果ヲ要トセサルハナシ然レトモ正法ノ時代ハ佛陀ノ果ヲ得ルトハ無限ノ長時間ヲ經サレハ得ルト能ハサルモノナレハ此ニ一生中ニアリテ之ヲ得ルト能ハサントモ聲聞ノ果即チ羅漢ノ果ハ此躬ニ得サルヘカラス之ヲ得サレハ佛教ニ遭遇シタル所詮モナキナリト考ヘ果ノ優劣ヲ慮ラス一途ニ得果ヲ旨トスル時代ナリ又像法ノ時代トナレハ已ニ釋尊ノ入滅ヲ隔ツト遙カナンハ此世ニテ果ヲ得ルトハ難シ此世

ニテ果ヲ得ルトハ難クレトモ修行ハ怠ルニカラスニ善一行モ之ヲ實踐スレハ未來ニアリテ早晚其果ヲ得ヘキトハ因果理法ノ差配ナルモノナリト信シテ專ラ修行ヲ勤ムル時代ナリ  
然リ而シテ大乘佛教ノ得果即チ成佛ト云フハ吾々凡人ノ肉體ニアリテ此一生中ニハ得ヘカラスナルトナリ即心是佛即身成佛ト云主論モナキニアラス然レハ其ハ理論タルノミ吾人ガ實際ニ成佛シテ釋尊ノ如キ彌陀ノ如キ無限ノ福祉ヲ満足スルト共ニ無量ノ智慧ト無涯ノ慈悲ヲ獲得スルトハ凡人トシテ一生中ニ得ヘキトハ万能ハサルトナリ然ルニ小乘佛教得果即チ羅漢ノ果ハ吾々凡人タル者モ此一生中ニアリテ得ントスレハ得ヘキモノナリ果シテ然レハ釋尊ノ滅後凡ソ五百年間即チ五師ノ出タル頃ハ小乘佛教ヲ弘ムヘキ時代ニシテ大乘佛教ヲ弘ムヘキ時代ニハアラスト云ヘキナリ  
更ニ佛教ニ係ラス世間普通ノ觀察ヲ以テ之ヲ解釋センカ凡ソ人智ハ歲月ト共ニ進歩スルモノナリ故ニ五師ノ出タル頃ヨリモ馬鳴龍樹等ノ出タル頃ハ人智大ニ進歩セリトイハサルヘカラス然リ而シテ小乘佛教ハ淺近ナリ大乘佛教ハ深遠ナリ

故ニ五師ノ出タル頃ハ未タ大乘深遠ノ説ヲ弘ムヘキ時代ニアラス小乘淺近ノ説ヲ弘ムヘキ時代ナリ又馬鳴龍樹等ノ出タル頃ハ大乘深遠ノ説ヲ弘ムヘキ時代ニシテ小乘淺近ノ説ヲ弘ムヘキ時代ニアラスト云ヘキナリ但シ釋尊ハ非凡ノ大聖人ナリ故ニ彼ハ例外ニオカサルヘカラス然リト雖モ彼ノ釋尊モ尙以テ大乘ヲ信仰サセントスルニハ初メ十有餘年ノ時間ヲ小乘ニ消費シテ後漸ク大乘ヲ開説シタマヘリ准テ知レ迦葉阿難等カ直ニ大乘佛教ヲ語ルモ人ユレテ信仰スヘカラスト云フヲ陳ヘタルノ私見ヲ

爰ニ於テ因ニ云ヘキハ付法相承是ナリ付法相承ト云ハ釋尊ノ滅後ニテイテ佛教ヲ能ク傳ヘタル師弟ノ系統是ナリ而シテ此付法相承ニツキ兩説アリ一ニ四祖相承二ニ二十八祖相承ノ兩説ナリ其五十四祖相承ト云フハ付法藏傳二卷中ニハ印度賢聖集ノ説ニシテ天台宗ノ如キ專ラ之ヲ取ル其二十八祖相承ト云フハ禪經ニ據レルモノニシテ禪宗ハ專ラ之ヲ取ル傳法正宗記景德傳燈錄佛祖通載釋氏稽古略等ヲ見ルヘシ然ルニ佛祖統紀五終止觀是夢一之中十四讀經記十五三等ニハ二十八祖相承ト云フハ典據ノ妄説ナリトス往是令ハ雙方諍論ス是非ヲ

(七〇)

判斷スル由ナケレハ姑ク兩説比對シテ表ヲ設ケオクヘシ

- 第一祖 迦葉……………周孝王時
- 第二祖 阿難……………周夷王時
- 第三祖 商那和修……………周宣王時
- 第四祖 末田地……………同
- 第五祖 優婆塞多……………周平王時
- 第六祖 提迦多……………周莊王時
- 第七祖 彌遮迦……………周襄王時
- 第八祖 婆須密多……………周定王時
- 第九祖 佛跋難提……………周景王時
- 第十祖 佛陀密多……………周敬王時
- 第十一祖 脇比丘……………周貞定王時
- 第十二祖 富那夜奢……………周安王時
- 第十三祖 馬鳴……………周顯王時

(七一)

- 第十三祖 迦毗摩羅……………周赧王時
- 第十四祖 龍樹……………秦始皇時
- 第十五祖 提婆……………前漢文帝時
- 第十六祖 羅喉羅多……………同武帝時
- 第十七祖 僧伽難提……………同昭帝時
- 第十八祖 僧伽邪舍……………同成帝時
- 第十九祖 鳩摩羅跋……………漢末王莽僭位時
- 第二十祖 闍夜多……………後漢明帝時
- 第二十一祖 婆修盤跋(天親)……………同安帝時
- 第二十二祖 摩拏羅……………同桓帝時
- 第二十三祖 鶴勒那……………同獻帝時
- 第二十四祖 師子……………三國戰亂時
- 婆舍斯多……………東晉明帝時
- 不如蜜多……………同武帝時

般若多羅……………宋孝武帝時

菩提達摩……………梁武帝時西來

右表中ニ第何祖ト記スモノハ付法藏傳ニ出ル二十四祖ニシテ是即天台宗ニ用ルトコロナリ又表中ニ第何祖ト記サルモノ五祖ヲ加ヘ而シテ第四祖ニ未田地ヲ省キテ二十八トスバ則チ禪宗ニ立ルトコロノ二十八祖トナル

而シテ其出世ノ年代ハ支那國ノ年代ニ配當シタルハ傳法正宗記並ニ釋氏稽古ニ配當セルモノヲ此ニ表セシナリ

### 第三期 小乘教ノ分派時代

#### 第一章 分派ノ起本

釋尊ノ入滅ヨリ凡ソ一有餘年間ハ教説ノ結集ニ付テハ上座部ト大衆部ト分レタルトモ雙方ニ致シテ教理上ノ諍ヒハナカリシナリ故ニ此間ヲ佛教ノ一致時代ト爲サルヘカラス然ルニ釋尊ノ入滅ヨリ凡ソ一有餘年ヲ過キタル頃即チ五師ノ中第五優婆塞多ノ時ニ至リ始メテ教理ノ異論ヲ生スルトナレリ之ヲ佛教中ニ宗派ノ別ヲ見ル起本トナス而シテ其異本ニ三種アリ(一)唯三藏ノ中ニテ律部ニ限ル

異論(二)三藏ノ全躰ニ就テ起ル異論是ナリ第一ハ優婆塞多ノ弟子中ニアリテ釋學ノ定メラレタル戒律ノ上ニツキ其意見ヲ別ニスル者アリ由テ律藏分テ五部トナル其表左ノ如シ

(七四)

- 曇無德部……………支那譯四分律四十卷是也
- 薩婆多部……………支那譯十誦律六十一卷是也
- 根本僧祇律 彌沙塞部……………支那譯五分律三十卷是也
- 迦葉遺部……………廣律未譯只譯戒本一卷耳
- 婆蹉富羅部……………未譯

斯ノ如ク優婆塞多ノ弟子中ニ於テ律藏分テ五部ト成ル然レトモ其ハ唯律藏ノ分派ナルカ故ニ之ヲ以テ宗派ノ分書トハ名ク難キナリ宗派ノ分出ハ經律論ノ三藏全體ニ就キ意見ヲ異ニスル所ニアルモノナリ(右律藏五分ノ一ハ三論玄義紙六十佛祖統紀三四十名義集四紙十四教儀集註上十五同增輝記三四等參考ヲ要ス)

第二、經律論ノ三藏全躰ニ關スル異論コソ宗派ノ分出ナルモノナリ而シテ其宗派ノ分出セシ時代ハ支那日本ニ傳ルトニ依リテ釋尊ノ出滅ヨリ第一百十六年目

ニ當リ小乘教分テ二派ト成リ第四百年ニ當ル頃ニハ三十派ノ多キニ至ルモノトス果シ然ラハ佛教紀之一百六十年頃ニ至リ始テ宗派ノ分出ヲ見ルト謂ヘキ歟

此ニ就キ右分派ノ始末並ニ各派ノ異同ヲ示スヘキ筈ナレトモ余ハ他日佛教史林ノ中ニ之ヲ詳説セムト欲ス故ニ今ハ讀者ノ參考書ヲ按内シテ之ヲ辨明スルヲハ略スヘシ其參考書ハ左ノ如シ

- 十八部論一卷(九紙)譯者未詳
- 部執異論一卷(廿一紙)真諦譯之
- 異部宗輪論一卷(九紙)玄奘譯之
- 右三部ハ同本異譯ナリ其原書ハ印度ノ筏蘇蜜多羅(此云儘友)ノ作ル所ナリ

- 異部宗輪論述記本末二冊窺基撰
- 部執異論疏卷數未詳真諦撰今ハ傳ラス古書ニ引用
- 三論玄義本末二冊吉藏撰第四十七紙
- 大乘法苑義林章七卷窺基撰一之本

(七五)

是等ノ書ヲ披カテ小乗分派ノ本略ハ粗々知リヌヘキナリ其詳細ニ至リテハ現今  
ニアリテ誰モ及ハズルヲ右ニ述ベシ

### 第二章 有部宗ノ綱領

#### (一) 有部宗ノ來歴

前章ニ陳ル如ク印度ニアリテ小乗佛教二十種ニ分レタリ其中ノ一派ヲ有部宗  
ト名ク部原語ニ薩婆多部ト云譯シ一切有而現今ハ吾人カ研究スヘキモノ否殊  
ニ研究ヲ要スベキモノハ有部宗ニアリトス何トナレハ左ノ三件アレハナリ(一)  
二十派ノ中ニテ小乗佛教ノ範圍ヲ出ラス能ク其體面ヲ守テ大乘ノ説ヲ混和ス  
ルコトナク又外道ノ説ニ雷同スルコトモナキハ唯有部宗ニアリ(二)小乗ニ二十種ノ  
分派アリト雖モ當時印度ニアリテ勢力ノ最モ強大ナルハ有部宗ニアリト云フ  
諸書ニ徴スレバ明瞭ナリ(三)小乗二十宗ノ中ニテ其經典ヲ支那ニ譯出シタルモ  
ハ有部宗ニ屬スルモノナリ他ニハ成實論一部アルノミ之ヲ除ケハ大藏中ニカ  
小乗部ノ經論ハ皆有部宗ニ屬スルモノナリ之ニ由テ支那譯ノ書ニ就テ小乗佛  
教ヲ研究スルハ有部宗ニ依テサカヘカラス否有部宗ヲ研究スルハ小乗

佛 教 如 何 ハ 悟 了 シ 得 ラ ン コト ナ 故 ニ 余 ハ 是 コリ 有 部 宗 ノ 綱 領 ヲ 辨 明 セ ン  
且 夫 余 ハ 此 頃 佛 教 史 林 ヲ 毎 月 二 回 發 刊 ス ル コト シ タ ン ハ 是 レ ヲ 史 乘 ノ 事 蹟  
ハ 多 ク 史 林 ノ 中 ニ 登 録 ス ル コト ナ 本 館 ノ 講 義 錄 三 ハ 教 理 ノ 方 ヲ 重 モ ニ 載 シ  
ト ス 是 レ 聊 カ 前 約 ニ 違 フ ル 傾 キ ア ン ハ 讀 者 ニ 對 シ 此 ニ 一 言 謝 辭 ス ル ト コト ナ  
リ 而 シ 其 教 理 ヲ 陳 ル ニ ツ キ 今 ヤ 有 部 宗 ノ 綱 領 ヲ 陳 シ ト ス 有 部 宗 ノ 綱 領 ヲ 陳 ル  
ニ ツ キ 先 ヲ 其 來 歴 ヲ 示 ス  
有 部 宗 ト 云 ハ 最 初 舍 利 弗 六 集 異 門 足 論 ト 云 ヲ 造 リ 大 目 犍 連 ハ 法 蘊 足 論 ト 云 ヲ 造  
リ 大 迦 多 衍 那 ハ 施 設 足 論 ト 云 ヲ 造 リ 已 上 三 部 ハ 佛 在 世 ノ 作 ナリ 提 婆 設 摩 ハ 釋 身  
足 論 ト 云 ヲ 造 リ 此 ハ 佛 滅 後 二 百 年 頃 ヲ 作 ト ス 後 蘇 密 多 ハ 品 類 足 論 ト 界 身 足 論 ト  
二 部 ヲ 造 ル 之 ヲ 合 シ テ 六 足 論 ト ハ 云 ナリ 已 上 六 部 ノ 中 ニ テ 施 設 足 論 ノ ミ 此 六 足  
論 ノ 出 ル ハ 有 部 宗 ノ 興 ル 濫 觴 ト ナ レ リ 否 コ ノ 六 部 ヲ 傳 承 シ 布 演 シ タ ル モ ノ 是 レ  
有 部 宗 ナ ル モ ノ ナリ 抑 モ 有 部 宗 ト 云 ハ 佛 入 滅 ヲ 凡 ソ 二 百 年 ヲ 過 タ ル 頃 ニ 迦 多  
衍 尼 子 ナ ル 者 大 部 ノ 著 書 アル ニ 由 リ 上 坐 部 ノ 中 ニ テ 別 派 獨 立 セ シ モ ノ ナリ

而ノ右迦多衍尼子ノ著書ト云フモノハ前ニ列テタル六足論ヲ意テ取リ全ク彼  
 説ヲ布演セタルモノナリ故ニ六足論ハ有部宗ノ別派獨立ヲ見ル蓋シテイハサル  
 ハカラスハ佛ノ著書ト云フモノハ前ニ列テタル六足論ヲ意テ取リ全ク彼  
 右迦多衍尼子ノ造ル書ト云ハ原本三万五千頌アリト云云(三十二字ヲ一頌トシテ  
 數ヘタルモノナリ)之ヲ數字頌ト云東晉ノ代ニ僧伽跋摩コレヲ譯シ三十卷トナシ  
 阿毗曇入鍵度論ト名ク大唐ノ玄奘ハ譯シ二十卷トナシ阿毗曇發智論ト名ク前ノ  
 六足論ト此ノ發智論ト有部宗ノ本典ト云ヘキモノナリ(因ニ云迦多衍尼子出世  
 ノ年代ニ異説アリ光記ニ五廿宗輪述記六丁西域記四丁五俱舍論圖記一丁三ヲミルヘシ  
 而シ佛入滅ヨリ第四百年ノ頃ニ北印度ノ健駄羅國ニ迦賦色迦ト云帝王アリ此王  
 ハ勢力強大ニシテ五印度並ニ外邦ヲ併セ領シタリ此王ノ佛教ヲ信スルノ最モ厚  
 キニ由テ四方ヨリ五百名ノ高僧即チ羅漢ヲ徵集シ迦濕彌羅國ニ於テ大ナル佛典  
 ノ編輯ヲナサシメタリ即チ經十萬頌論十萬頌律十萬頌ヲ編輯セシメタリ其事ハ  
 西域記二十五同三五等ミルヘシ此際ニ當リ有部宗ハ隆盛ヲ極メタルモノ、如シ右  
 三大編輯メ中ニテ論部ノ十萬頌ヲ支那ニ譯スルモノ二種アリ(一)宋文帝ノ時ニ北

涼ニアリテ浮陀跋摩ト云人コレヲ譯シテ百卷トナシ阿毗曇發智論ト名ク但シ  
 此ハ北涼ノ亡ル時ニ兵火ノタメ後四十卷ヲ燒失セリ故ニ今存スルモノハ前六十  
 卷アルノミ之ヲ名ケテ舊婆娑ト稱ス(二)大唐太宗皇帝ノ時ニ玄奘更ニ之ヲ舊譯シ  
 テ二百卷トナシ阿毗達摩大毗婆娑論ト名ク之ヲ舊譯ニ對シテ新婆娑ト稱スルコ  
 トナレリ(三)佛ノ著書ト云フモノハ前ニ列テタル六足論ヲ意テ取リ全ク彼  
 當時迦濕彌羅國ハ全國擧リテ有部宗ノ徒ナリ故ニ右婆娑論ノ成ルヤ彼國ノ教徒  
 ハ之ヲ宇宙唯一ノ寶典ト想ヒ佛説ノ經卷ヨリモ尙之ヲ珍重シテ國內ニ之ヲ秘藏  
 シ取テ外國ニハ之ヲ出ササルコトナセリ密ニ之ヲ外邦ニ出ササルノミナラス自  
 宗ノ徒ト雖モ外邦ヨリ來シモノニハ容易ニ之ヲ見セスト云程ニ秘藏シタリ蓋シ  
 當時ノ情況ハ國界ヲ守ルコト互ニ嚴ナルト共ニ又宗派相互ノ軋轢甚キカ故ナリ  
 時ニ佛入滅ヨリ第九百年ニ當ル頃北印度健陀羅國ノ有部宗ノ徒ニ世親トイヘル  
 高僧ノ出ルアリ此人初メ迦濕彌陀國ニ秘スル所ノ婆娑論ヲ見ント欲シ彼地ニ至  
 リ本名ヲ隱シテ竊ニ婆娑論ヲ讀ミ且ツ研究スルコトヲ得タリ之ニ由テ世親自國ニ  
 歸リタル後右婆娑論ヲ講習シテ阿毗達摩俱舍論ト云テ造ルコト俱舍論ト云ハ論



公平ニ立テ、説有部自家ノ説トイヘトモ理ニ合セサルモノハ非難シ他家ノ説トイヘトモ理ニ合セサルモノハ採用ストイフ批評的著述ナリ由テ此書ノ成ルヤ自宗他宗皆共ニ争フ之ヲ讀ミ之ヲ研クトナリ時人ニシテ號シテ聰明論ト云ニ至リシト云云西域記四三可見

而ノ右俱舍論ヲ支那ニ譯スルモノ二種アリ(一)陳ノ時ニ眞諦譯シテ二十二卷トナシ阿毗達摩俱舍釋論ト名クルモノ是ナリ(二)唐ノ時ニ玄奘譯シテ三十卷トナシ阿毗達摩俱舍論ト名クルモノ是ナリ兩譯アレトモ古來タテ新譯ノ方ヲ用ヒテ舊譯ヲ用スルモノナキナリ

此ニ由テ有部宗ヲ學ントスルニハ右ノ俱舍論ヲ學ビ婆娑論ニ移リ進テ發智論并ニ六足論ニ及フヘキトナリ此他順正理論八十卷顯宗論二十卷等見ノトヲ要ス

右云如ク晋ノ時ヨリ唐ノ時ニ至ル迄續々ト有部宗ニ關スル經典ノ譯書ヲ見ルハ即チ支那ニ於テ印度ノ有部宗ヲ傳播スル事蹟ト云モノナリ故ニ支那佛教十三宗ニ分レタリト云中ノ毗曇宗ト云即此有部宗ノトナリ但シ支那ニアリテハ學術的ニ之ヲ研究スルコト尤モ煽メナリシハ唐太宗ノ頃即チ玄奘販唐ノ頃ナリ此頃

玄奘ハ有部宗ニ關スル多シ梵書ヲ廣シ來リテ翻譯スルト同時ニ普光神泰法寶ノ如キハ説テ之ヲ講習シ三人共ニ俱舍論ニ就テ三十卷ツハノ註解書ヲ著ハセリ其書ハ今日本ニ行ハレ居ルヲ以テ當時ノ研究盛ナルヲ思フヘシ然レトモ支那ニハ唐ノ中世已後コレヲ研究スル者ナキニ至レルモノト見エタリ

サテ我日本ハ如何ト云ニ古代奈良ノ七大寺ニアリテ講習スル佛教ニ六宗アル中ノ俱舍宗ト云ハ即チ此有部宗ノトナリ之ヲ日本ニ始テ傳ヘタルハ皇極天皇ノ白雉四年ナリトス此時ニ道照ト云人支那ニ往キ玄奘ノ門ニ入り俱舍論ヲ傳ヘ來レリ其ヨリ後續々書類モ傳ハリ來ルアリ又隨テ之ヲ講習スルニ盛ニシテ註解ノ書籍モ多々出テタルヲナリ然レトモ日本ニハ各宗各派ノ中ニ學問トシテ行ハレタルコト古今頗ル盛ナルヲシテナレトモ宗教トシテ之ヲ實行スル人ハ甚々希ナルヲナリ否殆ト之ナシト云ヘキ景况ナリ自身ハ大乘佛教中イワレカノ宗派ヲ奉シツ、傍ラ小乘佛教ヲ研究セシカ爲メ學問トシテ之ヲ講習スルニ止マルモノナリ然レトモ學問トシテ之ヲ研究スルコトハ千有餘年ノ久シキ尙以テ地ニ落チズ各宗各派ノ中ニアリテ今盛ナルト謂ツベシ

サテ是ヨリ有部宗ノ教理ヲ陳ルニ宇宙論人身論ノ二大部トシテ辨明セン  
(二)有部宗ノ教理第一(宇宙論)  
第一 宇宙ノ分量

無限ノ空間中、仰々ハ上ニ天象アリ、俯スレハ下ニ地象アリ、種々雜多ノ動物植物ハ  
其間ニ生活シテ或ハ憂喜苦樂ノ情ヲ呈シ或ハ生滅榮枯ノ象ヲ演ス此ノ如キ万象  
万化ヲ網羅シテ總合的ニ宇宙ト名クルモノ乎之ヲ佛教ノ語ニ徵スレハ或ハ法界  
トイヒ亦ハ世界トイフ而シテ其宇宙ハ際限アルヘキカ又際限アルヘカラサルカト  
尋ヌルニ大乘佛教ノ説ハ言テ埃タズ小乘佛教ノ説トイヘトモ宇宙ハ無際限ナリ  
無分量ナリ無數量ナリトス夫レ空間ハ無際涯ナリタトヒ吾々凡人ノ思想ヲ以テ  
スルモ空間ニ其際涯アルヘシトノ考ヘテ發スレ能ハサルモノナリ故ニ華嚴經ノ  
中ニハ之ヲ喩ヘテ曰ク一鳥ノ西方ニ向テ飛フ一千年万年億万年ニ及ヒ瞬間モ休  
息スルコトナシトセンカ然レトキ毫厘モ西ハ近クナレリ東ハ遠クナレリト云フテ得レハ則チ無限ニハ  
ラス若シ毫厘モ西ハ近クナレリ東ハ遠クナレリト云フテ得レハ則チ無限ニハ  
ラサルナリ此ノ如ク南北ニ向ヒ去ルモ上下ニ向ヒ去ルモ同様ナリト云々空間無

限ノ狀況ハ實ニ此譬喩ニテ説キ得タリト謂フヘシ既ニ空間無限ナルカ故ニ空中  
ニ表現シ浮遊セル國土モ其數無量無邊ナリトイハサルヘカラス何ソ計算スヘキ  
限アラシ既ニ國土ヲ以テ無量無邊トシテミレハ其國土世界ニ生息セル動物界即  
チ佛教ニ謂ユル有情ナルモノ益々以テ無數量ナルコトハ辨テ俟タザルコトナリ故ニ  
起信論ノ中ニハ虚空無邊故世界無邊世界無邊故衆生無邊トイヘリ之ヲ佛教ニハ  
十方世界ト説キ或ハ十方法界トイフ此ノ如ク十方ニ無量無邊ノ世界アリテ宇宙  
ハ無分量ナリト云論斷ハ大乘小乘ノ別ナク通佛教ノ定論ナリ而シテ此ノ如キ茫邈  
タル説ハ曾テ門外者ノ疑懐ニ堪ヘサルコトナリシガ近歲泰西ノ學術輸入ト共  
ニ彼ノ哲理攷究ノ結果ト其説ノ符合スルトコロアルニ由テ方今ハ人ヲ疑ハ  
ス只之ヲ疑ハサルノミナラス數千年ノ古代ニアリテ已ニ此ノ如キ達見アルカト  
人皆敬服スルトコロナリ

第二 宇宙ノ開發

已ニ陳ル如キ廣大無限ノ宇宙界ハ何テ原質トシテ成ルカ又誰カ之ヲ作りタルカ  
又如何シテ斯ク開發シタルカト云如キ疑問ヲ解釋セントスルハ哲學者ノ職トス

ルトコロナルヘシ而シテ佛教ニハ如何カ之ヲ説明スルカト尋ヌルニ其説明ヤ一定  
セス或ハ業感縁起ト云説明アリ或ハ賴耶縁起ト云説明アリ或ハ眞如縁起ト云説  
明アリ或ハ無盡縁起ト云説明アリ蓋シ是レ淺ヨリ深ニ移リ粗ヨリ密ニ至リ後ヲ  
以テ前ヲ辨明シテ説テ完全ナラシムルモノナリ

然リト雖モ小乘佛教ハ第一ノ業感縁起説ニ止マリテ賴耶縁起ト眞如縁起ノ如キ  
ハ未ダ顯示セサルモノナリ故ニ今モ第一業感縁起ノ意ニ由テ右問題ヲ解釋スヘ  
キナリ抑モ此ノ如キ浩大窮リナキ宇宙万有ハ何ヲ原質トナシテ誰カ之ヲ構造シ  
如何シテ此開發ヲ見ル乎曰ク物質的ノ極微ハ是レ宇宙ノ原質ナリ精神的ノ業力  
ハ是レ宇宙ノ作者ナリ二者ノ中ニハ因果ノ理法ヲ包含セルニ由テ此ノ如キ宇宙  
ノ開發ヲ見ルモノナリ故ニ宇宙ノ外ニ宇宙ノ作者アルニアラス宇宙ノ原質アル  
ニアラス又構造ノ差配者干涉者アルニアラサルモノトス耶蘇教ト佛教ノ區別ミ  
ルヘキナリ

リ但シ極微其者ノ説明ハ學派ノ列アルニ隨ヒ多少ノ徑庭アルコトハ辨テ埃タズ今  
ハ佛教ニ云トコロヲ陳フヘシ極微トハ物質ノ至極小微ナルトコロニ名命シタル  
モノニシテ物理學ニ云トコロノ分子ノ如ク又化學ニ云フトコロノ元子ノ如キモ  
ノナリ若シ全ヲ以テイハシメハ佛教ニ謂エル極微ハ物理的ノ分子ニ配當スルモ  
化學的ノ元子ニ配當スルコト至當ナルヲ覺ユ何故ナレハ物理的ノ分子ト云モノ  
ハ數個ノ元子包含シタルモノナレハ尙コレヲ分析スヘキモノナリ化學的ノ元子  
ト云モノハ多元ノ包含シタルモノニアラサレハ更ニ之ヲ分析スヘカラサルモノ  
ナリ而シテ佛教ニ謂エル極微ハ更ニ分析スヘカラサルモノニシテ若シ更ニ之ヲ分  
析セントスレハ物質的ハ破壊ニシテ空ニ皈スト云ヘキトコロニ名命シタルモノナ  
ルカ故ナリ物理學ニ謂エル分子ナルモノハ婆娑論ニ謂エル隙遊塵若クハ牛毛塵  
ニ當ルヘキモノ、如シ請フ冗長ノ看アレトモ此ニ婆娑論ニ出タル物質ヲ如何ナ  
ル點ニマテ分析シタルヲ極微ト名クルカト云フテ示サシ

凡ソ物ハ小ナルニ隨ヒテ其重力ハ減少スルモノナリ重力減少スレハ空中ニ飄然  
浮游スルモノナリ此空中ニ浮游シテ吾人ノ肉眼モ偶見ルコトアル塵埃ヲ呼テ隙遊

塵トイフ即チ室内ニ偶光線ノ注射スルコトアル時ニ煙ノ如キ狀ヲナシテ細塵ノ亂動シ浮遊スルヲ見ルカ如キモノ是ナリトス此隙遊塵ヲ七分シタルヲ呼テ牛毛塵トイヒ此牛毛塵ヲ七分シタルヲ呼テ羊毛塵トイヒ此羊毛塵ヲ七分シタルヲ呼テ兔毛塵トイヒ此兔毛塵ヲ七分シタルヲ呼テ水塵トイヒ此水塵ヲ七分シタルヲ呼テ金塵トイヒ此金塵ヲ七分シタルヲ呼テ微トイヒ此微ヲ更ニ七分シタルヲ呼テ極微トイフ此極微ハ既ニ細微ノ極度ナレハ更ニ分析スルヲ得ス若シ更ニ分析スルコト得トスレハ其ハ極ニアラス若シ假ニ分析スルコト得トナサハ則チ事物的ノ範圍ヲ脱シテ空ニ販ストイハサルヘカヲサルモノトス極微ノ分量ノ至小ナルコト思フヘシ

因ニ隙遊塵ト云ハ極微ノ幾千抱合シタルモノト云コトヲ計算スレハ左ク如シ

第一、極微  
第二、微  
第三、金塵  
第四、水塵

此七極微抱合也  
此七微抱合也極微ノ數ヲイハハ四十九個トナル  
此七金塵抱合也極微ノ數ヲイハハ三百四十三個トナル

第五、兔毛塵  
第六、羊毛塵  
第七、牛毛塵  
第八、隙遊塵

此七水塵抱合也極微ノ數ヲイハハ二千四百〇一個トナル  
此七兔塵抱合也極微ノ數ヲイハハ一万六千八百〇七個トナル  
此七羊毛塵抱合也極微ノ數ヲイハハ十一万六千八百〇四十九個トナル  
此七牛毛塵抱合也極微數ハ八十三万三千五百四十三個トナル  
右ノ如ク七倍増ニ抱合アリトシテ大小ノ層級ヲ立ルモノハ凡ソ小積テ大ト成ルニハ一極微ヲ中心トナシ其四邊ト上下ノ六面ニ一個ツ、ノ極微カ附着スト見レハ中心ノ極微ト六面ノ極微ト合シテ七個ノ抱合トナル由テ之ヲ第二微ノ位トナシ更ニ一個ノ微七極微ヲ中心トナシ其四邊ト上下ノ六面ニ六個ノ微ガ附着スト視ナシ七微抱合ノトコロヲ金塵トスト計算シタルモノナリ其要ハ萬物ハ極微分子ノ集合体ナルモノナリト云コトヲ彰サントスルニアリ説ノ如ク定メテ七個ツ、抱合セルモノナリトノ意ニハアラス

人或ハイハソ萬物ハ一般ニ極微ノ集合シテ成レルモノトセハ萬物ノ屬性モ一般ニ殊ナルコトナカルヘキナリ然ルニ或ル者ハ剛ニシテ柔ナラズ或ル者ハ柔ニシテ

剛ナラス或ハ固結性ナルアリ或ハ流動性ナルアリト云様ニ事物ノ屬性種々様々ナルハ如何ト此疑問ヲ答辨スルガ所謂四大ナルモノナリ凡無量無邊ノ極微ニハ地水火風<sup>○</sup>通俗ニ云フ地水火風ニアラス通俗ニ云トコロノ地水火風ハ之ヲ四大<sup>○</sup>事ノ四大ト云フ今云トコロノ四大ト云ハ性ノ四大ト云モノナリ

テ合藏セリ語ヲ換テハ極微ニハ地水火風ト云四種ノ屬性ヲ固有セリ(地ト云ハ堅固ノ屬性ヲ云フ既ニ堅キ固結性アルカ故ニ彼此抵抗スルカアルモノ是ナリ水ト云ハ濕潤ノ屬性ヲ云フ既ニ濕潤性アルカ故ニ彼此相引クカアルモノ是レナリ火ト云ハ温熱ノ屬性ヲ云フ既ニ温熱ノ性アルカ故ニ腐敗ヲ止メ調熟スルカアルモノ是ナリ風ト云ハ運動ノ屬性ヲ云フ既ニ運動スベキ性アルカ故ニ或ハ延長シ或ハ流注スルカアルモノ是ナリ之ヲ四大ハ堅<sup>○</sup>濕<sup>○</sup>暖<sup>○</sup>動<sup>○</sup>ノ義ヲ性トシ持攝熟長ノ義ヲ用トスト説ク俱舍論一丁九ヲ見ヨ既ニ能成ノ極微一般ニ地水火風ト云四個ノ屬性ヲ固有セルカ故ニ所成ノ萬物ヲ見ルモ堅持<sup>○</sup>濕攝<sup>○</sup>暖<sup>○</sup>熟<sup>○</sup>動<sup>○</sup>(長)ノ四般ノ屬性ハ萬物ノ普有性トナレ然レ地水火風ハ一切萬物ノ普有性トナレ時ト場合ニ依テ其一部若クハ二部三部ノ勢力増大ヲ窮ルテアリ其一部若クハ二部三部ノ勢力増大ナルニ從テ他ハ一部若クハ二部三部ハ只潛勢力トナリテ保存スルノミ故ニ此

アリト雖モ恰モ此ナキカ如ク見ルモノアリ例ヘハ金屬土塊ノ如キハ他ノ屬性増大ヲ窮メテ水火風ノ屬性ハ薄弱ヲ呈スルモノナリ又滔々トシテ流ル水ノ如キハ水ノ屬性増大ヲ窮メテ他ノ三性屬ハ薄弱ヲ呈スル者ナリ又炭々トシテ昇ル火ノ如キハ火風ノ三屬性増大ヲ窮メテ地水ノ二屬性ハ薄弱ヲ呈スルモノナリ斯ノ如ク四般ノ屬性カ時ト場合ニ於テ或ハ顯勢力トナリ或ハ潛勢力トナルカ故ニ萬物ノ顯象同一様ナラス其普有性アルト共ニ又特有性アルヲ見ルモノナリト云カ

印度四大說ノ大意ナリ之ヲ四大能造萬物所造トス蓋シ四大能造萬物所造トイヘハトテ萬物ノ外ニ四大アリテ四大外ノ萬物ヲ造リ作スト云フニアラス萬物ニハ此四大屬性アルニ由テ此レ自家ノ體質ヲ保存シ作用ヲ呈スルモノナルヲテ四大能造萬物所造ト云シモノナリ

之ヲ要スルニ全宇宙ノ有形的ノ事物ハ皆此持攝熟長ノ四般ノ屬性ヲ固有セル無邊ノ極微カ集合シ成レル者也ト云ニ皈ス而シテ此四大說極微論ナル者ハ元ト佛陀ノ發明ニ係ル者ニアラス釋迦佛出世已前ヨリ印度古代ノ普通說ナリ居ルモノナリ佛陀ハ只古說ヲ自在ニ應用セシニ止ル故ニ余輩ハ印度ノ四大說極微論ト西

洋ノ元子説分子論ト孰シカ眞孰レカ非眞ナルヤノ判断ニ苦シム者ナリ蓋シ西洋ノ元子説分子論ハ試験實驗シ成績ナリ印度ノ四大極微説ハ萬物其象ヲ見レハ大地水火風ノ四種ニ區別シ萬物其成壞ヲ見レハ地水火風預リテカアルカ故ニ外筵的事ノ四大ヨリ内苞的性ノ四大ヲ想像シタルモノナリト云フコトハ疑ヒナキモノ如シ

然リ四大極微ノ説ハ古説ノ應用ナリ而シテ此宇宙開發ノ緣起ニ就テ佛陀ノ顯示セル佛教特色ヲ論ト云ハ吾人ハ業力ニ宇宙開發ノ支配者ナリト云點ニアリト云フベシ凡ソ世俗ニ論スル極微トカ四大トカ元素トカ分子トカ云ヘルモノハ本來存在セル物カ又時アヲ無ヨリ有テ生シタルモノ乎ト討ヌルニ無ヨリ有テ生スト云コトハ論理ノ法則ニ合セス故ニ之ヲ本來存在セル物トモテハナラヌ然ラハ其本來存在セル者ガ何ニ由テ本來宇宙ヲ構造セズ時アヲ宇宙ヲ開發スル乎ト云ニ佛陀ハ之ヲ説明シテ吾人ハ業力能ク此時ヲ惹起シ能ク極微ヲ支配シ能ク宇宙ヲ開發スルモンナリト言ヘリ既ニ業力能ク極微ヲ支配シ宇宙ヲ構造シタルモノニ此業力盡キヌレハ己ニ構成シタル宇宙還テ破壊スルノ時期ナカルヘカラ

スト説ク然リ破壊ノ時期アリト雖モ其際有轉シテ無ニ皈スト云ニハアラス元來有ナルモノハ未來モ永々有ナルヘキハ論理ノ法則ナリ故ニ破壊ノ後トイヘトモ前期ニ宇宙ヲ構造シタル極微ノ軀質無ニ皈スト云ヘカラス彼レ無ニ皈セサルカ故ニ吾人ノ業力即チ無量無邊ノ有情ノ業力重ナリヌレハ一切有情ノ業力共同シテ復々其極微ヲ擊動シ後期ノ宇宙ヲ構造スルニ至ル斯ノ如ク宇宙ハ滅スレハ又生シ生スレハ又壞シ壞スレハ又生シ生滅成壞連續無窮ナルコト恰モ晝夜ノ連續シ四季ノ循環シテ端ナキガ如キ者ナリト説ルハ佛教ノ世界論ナリ之ヲ名テ成住壞空ノ四大時期ト云フ豈現世界ノ生滅成壞スル一片ノミヲ説クモノナランヤ之ヲ名テ佛法ノ無始無終論ナリトモ云ヘシ詳カナルコトハ俱舍論ノ世間品ヲ見ヨ尙茲ニ吾人ノ業力ノ説明ヲ要スルコトナレトモ別項ニ讓リテ他日講述スヘキナリ

第三 宇宙ノ軀質

第一項 萬有ノ分析

已ニ小乗教ニ於ケル宇宙開發論ノ大要ヲ講シ終レハ今ヤ宇宙ノ軀質ヲ極メサルヤカラス然ルニ余前ニ云コトク小乗教ハ分析的ノ異軀論ヲ唱導スルモノニシテ總

合的ノ同躰論ヲ爲スモノニアラス蓋シ是ノ現象差別界ノ一方ニ止リテ本躰ノ無差別界即チ眞如ト云モノヲ姑ク措テ論セサルカ致ストコロ也故ニ宇宙ノ實躰ヲ極メトスルニハ先ツ萬有ヲ分析シテ見テハナラヌコトナリ然リ而シテ小乗教ニ萬有ヲ分析スル方法多種アリ曰ク五位トイヒ七十五法トイヒ或ハ五蘊ト説キ十二處ト説キ十八界ト説クカ如キハ皆是小乗教ニ於ケル萬有ノ分析法ナルモノナリ請フ圖ヲ以テ之ヲ表セン

第一位 色法……………色有十一種

第二位 心法……………心唯一種

第三位 心所法……………心所有四十六種

第四位 不相應行法……………不相應行有十四種

第五位 無爲法……………無爲有三種

右ノ上級ハ五位ト云分析法ヲ表シタルモノナリ下級ハ七十五法ト云分析法ヲ表シタルモノナリ此ニ由テ之ヲ觀ルニ五位ノ外ニ七十五法ト云モノアラズ又七十五法ノ外ニ五位ト云モノアルニアラズ三者同物ニシテ只分析法ニ異アルノ

ミ違フ同物ナルニ奚ソ三種ノ分析法ヲ設ル乎ト云ニ此ハ大判細判ノ異ト云モノナリ例セバ五位ト云ハ一學校ニ五年生アリト云カ如ク萬有ノ位置ヲ五大部ニ辨別シタルモノナリ又七十五法ト云ハ一學ノ生徒ヲ合計スルニ七十五名アリト云カ如ク同種類ノ中ニオケテ更ニ異狀ナルモノヲ細カニ分テ見タモノナリ故ニ色法事物ト云中ニテモ十二種アリ心所(心象ノ區分)ト云中ニテモ四十六種アリト云様ニ五位ト分ツトキニハ同等ノ位置ヲ占メタルモノガ七十五法トスルトキニハ種々様々ニ分レ來ルコト成ル是レ有部宗ニテオテ万有ヲ分類スル方則ナルモノナリ

又更ニ之ヲ辨別スル法則アリ曰ク万有ヲ有爲法ト無爲法ト二類ニ分ツモノ是ナリ有爲ト無爲ノ二類ニ分ツトキハ五位ト分ツ中ノ前四位ハ凡テ有爲法ト云中ニ收マル之ニ第五位ノ無爲法ヲ加ヘレハ一切万有ハ有爲ト無爲ノ二類ヲ出ザルコトナルナリ(佛教ニアリテ有爲ト云名稱ヲ用ルハ爲作造作ヲ有スト云意味ニシテ凡ソ何平ノ原因事情ニ由テ現象シ變化スル狀ノアルモノハ凡テ有爲法トイフ即チ諸現象ハ皆悉ク有爲法ナルモノナリ又無爲ト云ハ爲作造作ナシト云意味ニシ

テ他ノ原因キ事情ノカテ借テ出來タルモノニアラズ元來自然ニ自立自存シ生滅變化ノ象ナキモノハ凡テ無爲法ト云由テ大乘ナシハ真如ノ如キハ是レ無爲法ナルモノナリ既ニ然レハ有爲無爲ト分ツテハ之ヲ哲學ノ階ヲ借テイハハ現象ト本躰ト二類トイハシカ如キモノナリ

又更ニ分類スベキ方アリ曰ク物心理是ナリ即チ第二位ノ色法ト云ハ是レ事物ナリ第二位ノ心ヲ第三位ノ心所トハ所謂心ヲ第五位ノ無爲トイフハ所謂理ナリト云ヘシ但シ小乘ニ云トコロノ無爲ハ大乘ニ云トコロノ真如ニハ同シカラス然レトモ彼ニ云トコロノ無爲即チ擇滅無爲ノ如キハ若シ大乘ヲ眼孔ヲ以テ見レハ真如ニ當ルベキモノナルニ相違ナキナリ故ニ無爲ハ是レ理ナリト謂クベキナリ而シテ第四位ノ不相應ト云ハ物トモ名ク難ク又心トモ云難ク又理トモ呼ヒ難キモノナリ何トシレハ有部宗ニ云トコロノ不相應行ナルモノハ色ニアラス心ニアラス又無爲ニアラスシテ而シテ無形的ノ實躰アルモノナリ生滅スルモノナリト説クカ故チ然レトモ若シ之ヲ經量部キ唯識論ノ意ヲ見レハ物心二者ノ中ニ收ルモノト云ハサルヘカラス何トナレハ唯識論等ニハ不相應行ハ色心二者ノ外ナラサ

ルモノトスルカ故ナリ

第四 因果ノ法則

前ニ表列シタル如ク五位若シハ七十五法ト分類スルモノコトモ萬有ナルモノハ元來無ナルモノハ中途ニ突如トシテ生出セシモノカ將タ本來ノ存在ニシテ中途ニ生出セシモノニハ非ルカト尋ルニ万有ハ本來ノ存在ニシテ未來モ永々滅無ニ皈スト云ガ如キトハ必ス之オキモノトス万有ハ所謂無始無終ナルモノトス三世實有法躰恒有ト古來唱へ來ル格言ハ蓋シ此ヲ云モノナリ要スルニ萬有ハ時間的ニ論スレハ無始無終ナリ而シテ空間的ニ論スレハ各個其性質ヲ別ニシ其能力ヲ殊ニスルモノニシテ物轉シテ心ト成ルトモナク心變シテ物ト成ルトモナク無量無邊ノ萬有ハ横ニ劃然トシテ差別シツテ堅ニ依然トシテ其性質ヲ保存シツ、過去現在未來ノ三世ノ長途ヲ歩ミツハアルモノナリトスルハ蓋シ有部宗ノ意ナリ果シテ然ラハ吾人ノ目撃スル万有ニ變化ノ現象アルハ如何ト云疑問起ル有部宗ハ之ヲ答辨シテ云ク凡ソ万有ニ變化アルカ如ク見ルモノハ万有ノ集合離散スル事情ニ由ルモノナリ其實ハ万有ノ躰質ニ變化アルハ非ルナリトス



テ他少原因等事情ノカテ借テ出来タルモノニテアラズ元來自然ニ自立自存シ生滅變化ノ象ナキ至ラ凡テ無爲法ト云由テ大乘ナシハ眞如ノ如キハ是シ無爲法ナルモノナリ既ニ然シハ有爲無爲ト分ツテ之ヲ哲學シ借テイハ現象ト本體ト二類トイハシカカ如キモノナリ

又更ニ分類スベキ方アリ曰ク物心理是ナリ即チ第一位少色法ト云ハ是シ事物ナリ第二位少心法第三位少心所トハ所謂心ナリ第五位少無爲トイフハ所謂理ナリト云ハシ但シ小乘ニ云トコロノ無爲ハ大乘ニ云トコロノ眞如ニハ同シカラス然シトモ彼ニ云トコロノ無爲即チ淨滅無爲ノ如キヲ若シ大乘ノ眼孔ヲ以テ見レハ眞如ニ當ルベキモノトナルニ相違ナキナリ故ニ無爲ハ是シ理ナリト謂フ人キナリ而シテ第四位少不相應ト云ハ物トモ名少難ク又心トモ云難ク又理トモ呼ビ難キモソレ又何レニシテ有部宗ニ云トコロノ不相應行ナリトモ云ハ色ニアラズ心ニアラズ又無爲ニアラズシテ而シテ無形のノ實體アルモノナリ生滅スルモノナリト説クカ故チ然シトモ若シ之ヲ經量部ノ唯識論ノ意ヲ見レバ物心三者ヲ中ニ取ルモノノ云テ何レナルハカラス何レナリテ唯識論等ニテ不相應行ハ色心二者ノ外ナラズ

第四 因果ノ法則

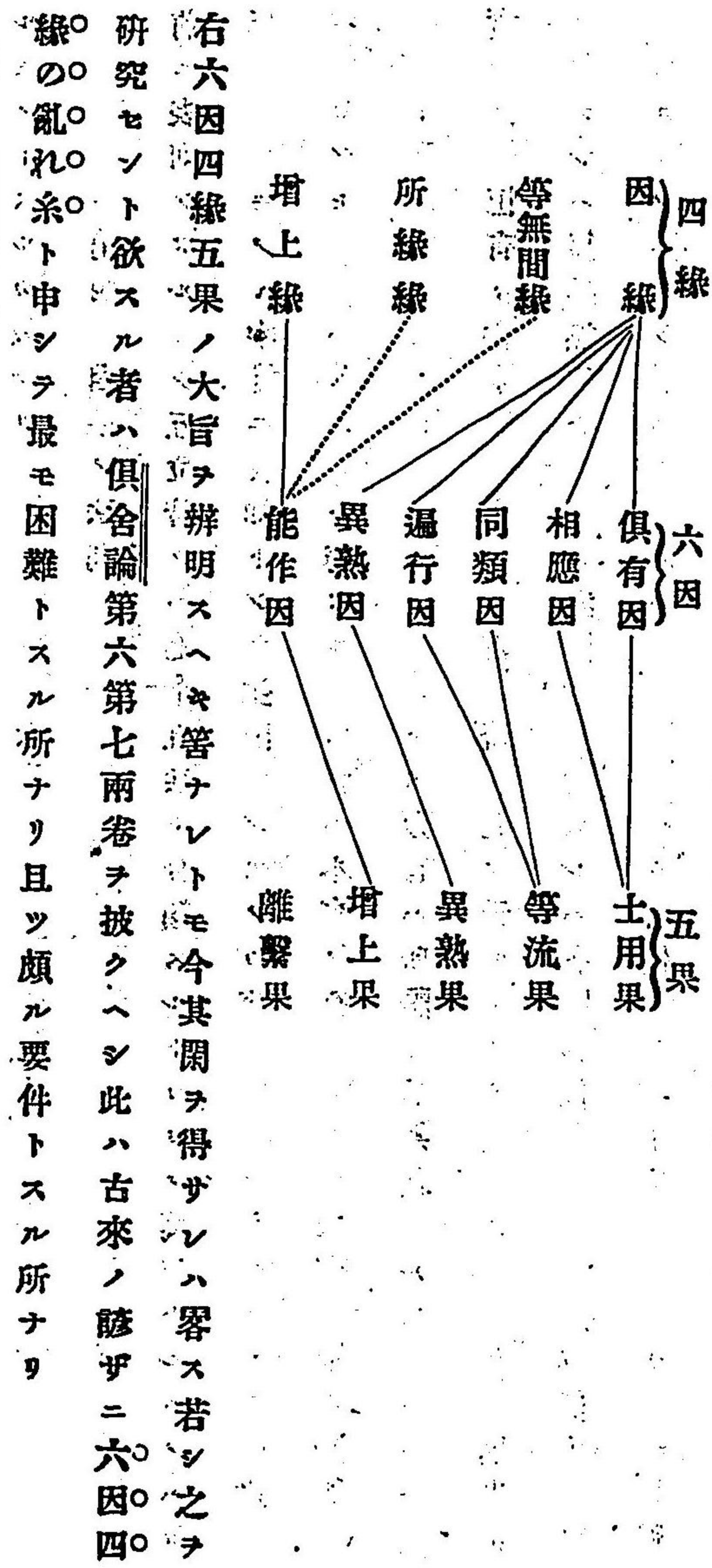
前六表列シタル如ク五位若シハ七十五法ト分類スルモノナリ即チ萬有ナルモノニテ來無ナルモノハ中途ニ突如トシテ生出セシモノヲ將テ本來ノ存在ニシテ中途ニ生出セシモノニハ非ルカ

飯スト云ガ如キトハ必ス之チモノトス万有ハ所謂無始無終ナルモノトス三世實有法體恒有ト古來唱ヘ來ル格言ハ蓋シ此ヲ云モノナリ要スルニ萬有ハ時間的ニ論スレハ無始無終ナリ而シテ空間的ニ論スレハ各個其性質ヲ別ニシ其能力ヲ殊ニスルモノナリ

邊ノ萬有ハ横ニ割然トシテ差別シテ堅ニ依然トシテ其性質ヲ保存シツ、過去現在未來ノ三世ノ長途ヲ歩ミツマハ

果シテ然ラハ吾人ノ目撃スル万有ニ變化ノ現象アリ如何云疑問起ル有部宗ハ之ヲ答辨シテ云ク凡ソ万有ハ變化アルカ如ク見ルモノハ万有ノ集合離散スル事情ニ由ルモノナリ其實ハ万有ノ特質ニ變化アルモノナリ

然レハ万有ハ何故ニ集合離散スルコト乎ト問ヘハ有部官ハ之ニ答ヘテ原因結  
果ノ法則ニ差配セラレテ集合離散スルモノナリトイハントス  
果ノ然リトスレハ如何ナル原因結果ノ法則カ能ク万有ヲ差配シテ集合離散セシ  
ムルカト問ヘハ有部宗ハ爰ニ於テ六因四緣五果ト云フ因果法ヲ説クモノナリ其  
六因四緣五果ノ名目并ニ連絡ヲ表スレハ左ノ如シ



之ヲ要スルニ万有ハ此ノ如キ因果法ニ由テ集合離散スルカ故ニ變化起伏ノ現象  
ヲ見ルモノナリ蓋シ万有ハ只横ニ集合離散スルノミナラス又堅ニ生住異滅スル  
モノナリトス而シテ堅ニ生住異滅スルハ因果法ノ外ニ又タ不相應行ノ中ノ生住異  
滅ナルモノアリテ彼ガ干涉ヲ受ルニ由ルモノトス此ニ依テ万有ハ躰性存ナレト  
モ未來ヨリ現在ニ移リ現在ヨリ過去ニ入りテ暫クモ休息スルコトナキモノナリト  
ス婆娑三十九ニ生滅異滅ノ四相ヲ論スルニ付テ無因緣故説無轉變有因緣故説有  
轉變ト説キ更ニ轉變ヲ釋シテ凡ソ轉變ト云ニツキ自體轉變ト作用轉變ノ二種ア  
リ而シテ吾人ノ見ル万象ノ如キ自體轉變ハアルコトナクモ作用轉變ハアルモノ  
ナリトス作用轉變トハ即チ因果法ト生住異滅ノ四相ノ干涉ヲ被ルモノ是ナリ之  
ヲ名テ有爲法ト云フ

右ノ如ク万有ハ恒存ナレトモ而シテ作用轉變アリテ未來現在過去ノ境界ヲ分チ甲  
ハ未來ナリ乙ハ現在ナリ丙ハ過去ナリト云フヲ得ルニツキ異論アリ婆娑論七十  
七初俱舍論二十三ニ出ツルモノ是ナリ要スルニ万有ハ恒存ナレハ三世ノ區別ハ  
アルヘカラス然ルニ佛ハ常ニ過去現在未來ノ語ヲ説クハ如何ト云フ疑問ヲ解釋

スルニ就テ四家ハ異説ヲ生シテ其味辭ノ之ヲ略陳セシメ  
 (一)類不同ナルカ故ニ山曰ク方有ハ既ニ恒存スレバ其體ハ始終同一ニシテ差異ハ  
 ハ其體ハ既ニ恒存スレバ其體ハ始終同一ニシテ差異ハ  
 其人形ヲ鎔化シテ牛馬ハ形ヲ造リ更ニ之ヲ鎔化シテ瓶等ノ類ヲ鑄ル如ク其ハ物  
 體ハ前後同一ニ金屬ナレトモ其類ハ前後異ナルカ如シ即チ方有其體ニ別ナクレ  
 ドモ過去已滅ノ類ト現生未滅ノ類ト未來未起ノ類ト同シテ其ハ故ニ三世ハ  
 別ニ説テ以テ云(別説ノ説) 誠ニ自轉轉變ハマレマレニシテ其體ハマレマレ  
 (二)相不同ナルカ故ニ曰ク此ハ方有ハ過去ノ相ト現在ノ相ト未來ノ相ト此三世  
 ハ別ニ相トテ方有ハ皆此三世ノ相ト同時ニ帶ルモノナリ然レトモ或ル時ニハ過去  
 ノ相ト合スルニ強クシテ現在未來ノ相ト合スルニハ弱シ此時吾人ハ過去ト見  
 ル又或ル時ハ現在ノ相ト合スルニハ強クシテ過去ト未來ノ相ト合スルニハ弱シ  
 此時吾人ハ現在ノ相ト見ル又或ル時ハ未來ノ相ト合スルニハ強クシテ現在  
 過去ノ相ト合スルニハ弱シ此時吾人ハ方有ト見ル之ヲ例ルニ一夫多妻ヲ有ス  
 ルニ或時ハ甲ノ妻ト合ス然レトモ他ノ妻妾ハ離縁シタルニアラス又或時ハ乙ノ  
 妻ト合ス然レトモ他ノ妻妾ハ離縁シタルニアラス又或時ハ丙ノ妻ト合ス然レト  
 モ他ノ妻妾ハ離縁シタルニアラスカ如シ云云(妙音ノ説)

(三)待不同ナルカ故ニ 曰ク方有ハ既ニ恒存ナリ恒存ナルカ故ニ前後同一體ニシ  
 テ過去現在未來ノ區別アルヲナシ然ルニ三世ノ名アルハ只前後相待ノ上ニ設ケ  
 タル假名ナルノミ換言スレハ所目ノ體ハ同一ナレトモ能目ノ名ニ差別アルノミ  
 而シテ名ノ差別ハ對望ノ異ニ由ルモノナリ例セハ一婦ヲ若シ其親ニ對スレハ子ト  
 云ヘク若シ其夫ニ對スルハ妻ト云ヘク若シ其子ニ對スレハ母ト云ヘシ然レトモ  
 其人體ニ異アルニアラスカ如シト云云(覺天ノ説)

(四)位不同ナルカ故ニ 曰ク恒存ノ方有ニシテ三世高名ヲ異ニスルモノハ本體ノ  
 點ニ依ラズ作用ノ點ニ依ルモノナリ作用ノ未ト正ト已ト位置ヲ異ニスルニ由テ  
 三世ノ稱號ハ立スルモノナリ即チ未作用ノ位ニアルモノハ凡テ未來ノ方有ト名  
 ケ正作用ノ位ニアルモノハ凡テ現在ノ方有ト名ケ已作用ノ位ニアルモノハ凡テ  
 未來ノ方有ト名ケ例ヘハ算盤上ニ一個ノ籌ヲ以テ若シ一ノ位ニ置ケハ一ノ數ト

成リ若シ十ノ位ニ置ケハ則チ十ノ數ト成リ若シ百ノ位ニ置ケハ則チ百ノ數ト成  
ルカ如シト云云(世友ノ説)

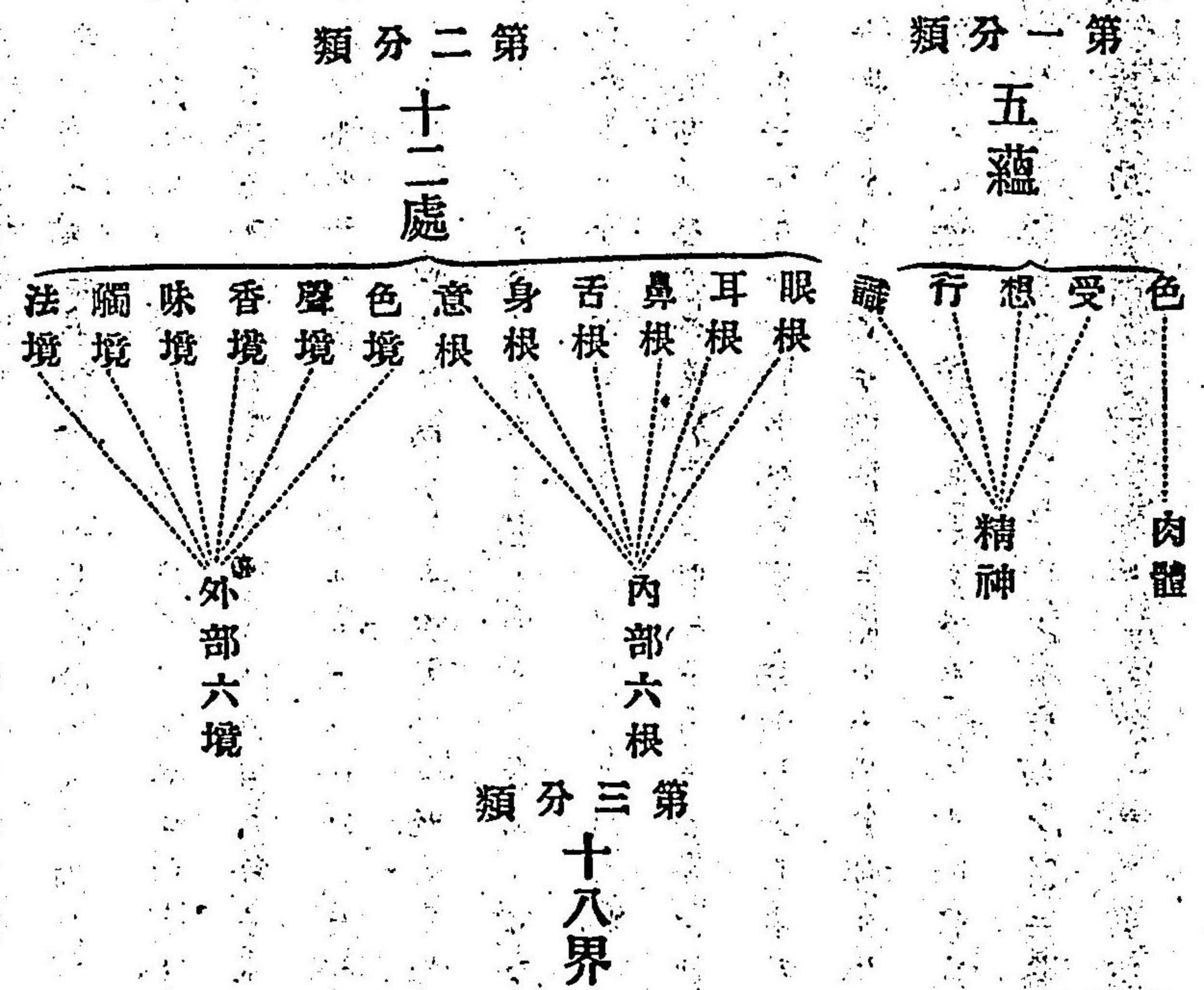
右四説アレトモ婆娑論俱舍論ヲ正トシテ探ルモノハ第四説ナリ而シテ第四説ニ未  
作用ノ位トイヘルハ即チ因縁ノ調子未タ揃ハサル時ナリ正作用ノ位トハ因縁ノ  
調子ノ正ニ揃フタル時ナリ已作用ノ位トハ因縁ノ調子ノ已ニ欠乏シタル位ナリ  
果ノ然ラハ原因ノ結果ノ理法ニ由テ横ニ集合離散スルト共ニ生住異滅ノ四相ト  
干涉アルニ由テ其自體ハ恆存ニシテ轉變スルヲナクシテモ其表彰ハ生滅起伏ス  
ルモノアリ之ヲ名テ有爲轉變ト説キ或ハ諸行無常是生滅法ト説ケルモノナリ  
然リ而シテ此ハ如ク万象ノ轉變スルニ由テ過去現在未來ノ名ヲ建立スル順序ニ  
就テ二種ノ順序ヲ設ルモノハ佛教ナリ第一ヲ法相生起ノ次第ト名ク第二ヲ善惡  
業感ノ次第ト名ク第一ノ法相生起ノ次第ト云ハ要スルニ客觀的ニ萬有ハ生起伏  
滅スル順序ヲ定ルニアリ第二ノ善惡業感ノ次第ト云ハ要スルニ主觀的ニ吾人ハ  
轉生相續スルハ順序ヲ講スルニアリ若シ客觀的ニ萬有ノ生滅スル順序ヲ語ルト  
キハ未來ヲ初トシ現在ヲ中トシ過去ヲ後トス即チ未來ヨリ現在ニ移リテ過去ニ

流レ行クト云順序ナリ然レモ若シ之ヲ主觀的ニ吾人ノ生死相續スル順序ヲ語ル  
トキハ過去ヲ初トナシ現在ヲ中トナシ未來ヲ後トス即チ過去ヨリ現在ニ來リテ  
未來ニ趣キ行クト云フ順序ナリ此順序ノ主觀ト客觀ニアリテ相反スル模様ハ恰  
モ流車ニ乗シテ山水ノ風景ヲ詠メツ、東西スルニ流車若シ東ヨリ西ニ向ヘバ風  
景ハ西ヨリ現シ來リテ漸ク西ニ隱レ去ルカ如キモノナリ

第五 眞理ノ顯示

凡ソ學術ノ目的トスルトコロハ何レニアカト問ヘハ眞理ヲ知ルニアリ宗教ノ  
目的トスルトコロハ何レニアカト問ヘハ眞理ノ堂上ニ到達セントスルニアル  
モノナリ此ニ由テ學術界ハ未タ顯ハレザル眞理ヲ探究シテ正ニ之ヲ知ルヲ以テ  
目的トナシ宗教界ハ他ノ已ニ顯ハシタル眞理ニ窮ラ到達セザルノ區別ハア  
レトモ眞理アリトシ其眞理ヲ目的トスルコトニ於テハ彼此同シキナリ故ニ小乘佛  
教モ大乘佛教モ眞理ヲ顯示セザルハナシ眞理ハ大乘モ小乘モ等シク顯示ストイ  
ヘトモ大乘ニ謂トコロノ眞理ト小乘ニ謂トコロノ眞理ト眞理ニ差別アリ蓋シ小  
乘ト大乘ノ別ハ本ト對スル所ノ根器ニ智愚利鈍ノ區別ニ由テ生シタルモノナレ

顯示スル所ノ真理は自然ト區別ヲ見ルニ至リシモノナリ此ガ謂ユル佛陀ノ對  
 機ニシテ大應病與藥トイハル所ナリ  
 然レハ大乗佛ヲ謂フハ如何又小乗ニ謂トコロノ真理如何ト尋ヌルニ  
 諸行無常諸法無我涅槃寂靜コトヲ小乗佛教ノ真理トナス又大乘ハ實相印ト云テ  
 以テ真理トシテ此事ハ詳ニ講スルハキナレトモ閑ヲ得サレハ略スヘシ  
 有部宗教理第二人身論  
 先ニ有部宗教理ノ要領ヲ宇宙論人身論ノ二部ト分テ講セシヲ約シタリ其中  
 此ニ不完全極限ナルトイハレモ宇宙論即チ客觀的教理ノ綱領ハ前段ニ陳ヘ終レリ  
 是ヨリハ人身論即チ主觀的教理ノ大方ヲ示シ以テ結ヲ取ルヘキナリ  
 人身論即チ付テ有部分類ヲ要スルカ如ク人身論ニ就テモ第一ニ要スヘキ人  
 身ノ分類方ナリト先ニ吾人一身ヲ分類シテ見ザルハ吾人ノ一身ヲ説明スル  
 而シテ佛敎ニ如何カ以テ身ヲ分析スルコト云フニ三種ノ分類方アリ左ニ之ヲ表セ  
 一 色 行 想 受 識  
 二 肉體 精神  
 三 眼根 耳根 鼻根 舌根 身根 意識



眼根 耳根 鼻根 舌根 身根 意識  
 眼識 耳識 鼻識 舌識 身識 意識  
 法境 觸境 味境 香境 聲境 色境  
 六根(主觀的の器關ノ區分)  
 六識(主觀的の精神ノ區分)  
 六境(客觀的の万象ノ區分)

右三科ノ分類方ヲ呼テ蘊處界ノ三科ト云フ而ノ今三種分類ノ名稱ヲ一一據ヒ擧  
テ講述スヘキ開テ得ザレハ只何故ニ此ノ如キ三種ノ分類方アルカト云テ簡單  
ニ辯明スヘキナリ

凡ソ普通ノ學術上ニハ此ノ如ク人身ヲ分類スルヲアルヘカラス佛教ハ何故ニ此  
ノ如キ分類方ヲ設ケタルカト討ヌルニ要ハ外道ノ實我ヲ主張スルニ對シテ無我  
ナリト云フ道理ヲ辨明センガ爲ニ此ノ如キ分類方ヲ設ケタルモノナリ但シ實我  
存在論ニ對シ無我論ヲ主張センカタメニ三種ノ分類方ヲ立テタルモノハ蓋シ其  
別由ナキニアラサルヘシ

第一五蘊ノ分類方ハ實我ノ躰アルヲナシト云テ證明センカ爲ナリ夫レ實我ト  
ハ如何ナルモノゾ曰ク外導輩ノ確執セル實我トハ常一主宗ノ定義ヲ具ヘタルモ  
ノヲ呼テ我トス即チ時間的ニ論セハ右往今來生滅變壞アルヲナク常ノ又空間的  
ニ語ラハ集合躰ノ組成物ニアラス義一ノ本來自立的獨存的固定的ナルモノ是レ實  
我ノ躰ナリ政ニ常一トイフ而ノ其實我ノ躰ニ具ヘタル作用ハ實ニ自由自在ノ統  
轉力專權力全能力ヲ有スルモノニシテ恰モ君主專治國ノ帝王宰相ガ其國家ニ於

ケル政務ニツキ實ニ自由自在ノ力能ヲ有スルガ如キモノナリ故ニ常一ト共ニ又  
主宰ノ意義ヲ具ヘタルモノトス然レハ何者ヲ統轄シ差配スルカトイヘハ即チ吾  
人ノ身心ヲ統轄シ差配スルニツキ專權自在ノ力能アルモノトスルニアリ之ヲ名  
テ離蘊ノ我ト云フ又或ハ身心其者ノ上ニ躰常住ナルカ如ク或ハ集合躰ニハ非ル  
カ如キ考ヘテ懐ク者アリ此妄想アレハ必ス吾人ト云フ實物ヲ認メテ是聞覺知運  
動等ニ實用アルモノト思ヘルモノナリ之ヲ名ケテ即蘊ノ我トイフ是等即蘊若ク  
ハ離蘊ノ我ノ無ナルヲ知ラ令ルモノハ五蘊ノ分析方ナリトス抑モ家屋ト云モ  
ノ實ニ存在セリト認ムル者ニ對シ材木ノ外ニ家屋ナシト云テ説明スルニハ如  
何カスヘキカ其ハ家屋ヲ解キ摧キテ見セルニ如クハナカルヘシ今夫レ人身ヲ見  
テ常一主宰ノ實物ナリト確執スル者ニ對シ其然ラサルヲ證明センニハ之ヲ分  
析シテ見セルニ如カザルナリ之ニ由テ引き寄せて結べば柴の庵りなれども解れ  
ばもとの野原なりけりト云如ク集合躰ノ上ニテハ實物ノ如クナレトモ分析シテ  
見レハ色受想行識ノ五蘊ヨリ外ナシ説テ無我ノ理ヲ顯彰スルモノハ五蘊ノ分類  
方ナリトス

第二ノ十二處并ニ第三ノ十八界ノ分類ハ何ノ爲メカト云ニ此ハ實我ハ無トイヘ  
 トモ實我アルカ如キ靈妙ノ作用ヲ呈スル所以ヲ説明セシカ爲ナリ  
 抑モ吾人ニハ身心ヲ總理スルトコロノ我アルナシトセハ何ニ由テ知覺運動等  
 奇々妙々ノ作用ヲナスカ神ノ力ナルカ佛ノ力ナルカ將タ鬼カ魔カ何者乎ト云ニ  
 他ニ干涉スル者アリテ知覺運動等ヲナスニアラス内部ヲ尋ヌレハ眼耳鼻舌身意  
 トイフ六根ノ機關アリ外界ヲ尋ヌレハ色聲香味觸トイフ剌擊物アリ斯ノ如ク内  
 部ト外部ノ因縁ノ調子ノ能ク揃フトコロニ於テ精神作用ヲ呈スルアリ爰ニ於テ  
 奇々怪々ノ靈妙作用ヲ見ルニ至ルモノナリ  
 之ヲ要スルニ五蘊ノ分析ヲ以テハ吾人ノ身心ハ既ニ常ニアラス一ニアラス故ニ  
 常一トイフ定義ヲ下スヘキ眞實ノ我ノ躰アルナシト躰ノ邊ヨリ無我ナルヲ證  
 明シ又十二處ヲ以テハ内外種々維多ノ調子ノ相合スル因縁和合ニ依テ知覺運動  
 等ノ作用ヲ見ルモノナルカ故ニ主宰トイフ定義ヲ下スヘキ我ハアルナシト作  
 用ノ邊ヨリ無我ナル旨ヲ説明セント計ルモノナリ  
 主觀的人身ノ分類方ハ已ニ辨シタレハ是ヨリ人生ノ流轉並ニ還滅スルヲ

略述セザルヘカラス夫レ佛教ノ主旨タルヤ吾人ヲシテ迷ヲ離レ悟リニ到ラ令ノ  
 トスルニアリ而シテ其迷ノ境遇ヲ流轉ト云フ即チ生死輪轉シテ止マザルヲ意味ス  
 又此迷ニ反シ徐々トシテ悟ノ位置ニ趣向シ或ハ已ニ到達スルヲ名ケテ還滅トイ  
 フ即チ生死輪轉ノ關係ヲ漸ク絶滅シテ涅槃トイヘル終極ノ眞理界ニ還皈スト云  
 フ意ナリ  
 而シテ此流轉ト還滅ト即チ吾人ノ生死輪轉スル所以ト又其生死輪轉ヲ止メ此ト反  
 對ノ方向ニ進向スル所以トヲ説明スルニ二種ノ説明アリ一ヲ苦集滅道ノ四諦ト  
 名ケ他ノ一ヲ十二因縁ト云フ此二種アリトイヘトモ等シク因果ノ理法ヲ根據ト  
 シテ吾人ノ迷フ所以ト又悟ル所以ヲ説明スルニアリ請フ先ツ苦集滅道ノ四諦ノ  
 方ヨリ講セン  
 ソレ小乗佛教ノ意ハ吾人ノ境遇ニ於ケル諸現象ハ内部ノ身心モ外部ノ万象モ一  
 トシテ苦ノ境遇ナラザルモノハナシト世ニ快樂ナキニアラス快樂アリト雖モ之  
 ヲ他ノ一方ヨリ觀察スレハ亦苦痛トイハルヘキ性質ヲ有スルモノナリ故ニ此世  
 界ノ全躰ヲ以テ盡ク苦ナルモノトス是レ小乗佛教ノ厭世的ナリトイハル、所ナ

リ而シテ此ノ如ク此世界ヲ以テ純然タル苦境ナリト見ルモノハ真正ノ見ナリト  
ハ意味ヲ以テ苦諦トイフ要スルニ苦諦トハ此世界百般ノ諸現象ニ名ケタルモノ  
ナリ

己ニ此世界ヲ觀察シテ万象總テ苦痛ノ境遇ナリト知り訖リヌレハ第二ニ起ルヘ  
キハ此ノ如キ苦ナル現象ハ抑モ何ニ由テ起ルカノ疑問是ナリトス而シテ佛教ハ  
其疑問ヲ解釋シテ其ハ吾人ノ過去世ニ爲シタル業并ニ煩惱是ナリトス即チ上リ  
テ天ニ生レ下リテ地獄等ニ生レ或ハ人間世界ニ生ル、モ凡テ神ヤ佛ノ干涉スル  
ニアラス只吾人自身々々ノ煩惱ト造業ノ勢力ニ由テ受クル所ノ果報ナリトス要  
ハ主觀的ニ苦樂ノ原因ヲ求メテ其煩惱ト造業トニ集諦ノ名ヲ命シタリ蓋シ種々  
様々ノ果報ヲ集メ起スト云フ意ナリ 問云誰カ此煩惱ヲ起シ此業ヲ造ルカ前辨  
ノ如ク實我ハアルヲシ然レハ煩惱ヲ起ス者并ニ業ヲ造ル者アルヘカラス 答  
テ云ク上ニ謂ユル苦諦中ノ身心コレ能ク煩惱ヲ起シ諸業ヲ造ルナリ故ニ實ハ苦  
諦ノ外ニ集諦ナク集諦ノ外ニ苦諦ナシ但結果トナル點ヲ呼テ苦諦ト名ケ原因ト  
ナル點ヲ呼テ集諦ト名ケタルモノナリ依テ俱舍論廿二丁二果性取蘊名爲苦諦因性

取蘊名爲集諦由此苦集因果性分名雖有異非物有異トイヘリ要スルニ集アレハ必  
ス苦アリ苦アレハ又集ヲ造ル之ニ由テ苦ト集ト因果連續シテ前々後々終ニ斷ヘ  
サルモノ是レ生死輪轉ノ有様ナリ無我ニシテ而モ生死相續スト云所モ亦此ニア  
ルモノナリ

右云トコロノ苦諦集諦ハ要スルニ迷ノ因果ヲ論スルニアリ而シテ苦ハ集ニ由テ  
起ルモノトスレハ集ヲ斷滅セサルヘカラス集若シ斷滅スレハ苦ハ生セントスル  
モ生スルニ由テナク受ントスルモ受クルニ由テナキニ至ル故ニ佛法ノ本旨只此集ヲ  
斷滅スルニアリ集ノ因已ニ斷滅シテ苦ノ果再ヒ生セサル地位ニ至リヌレハ即是  
レ涅槃ノ悟リト云モノナリ此境遇ヲ名ケテ滅諦トイフ蓋シ苦トイヒ集トイフ迷  
ノ關係ヲ滅却セリトノ意ナリ

己ニ苦集共ニ滅却シタルトコロ是レ眞樂ノ涅槃果ナリトスレハ如何スレハ其場  
ニ到達スヘキカノ疑問起ラサルヲ得ス之ニ依テ其場ニ到ルヘキ方法即チ滅ト稱  
スル悟リノ果ニ趣クヘキ種々雜多ノ實行法謂ユル俗教特殊ノ諸般道德コレヲ要  
約スレハ戒定慧ト云カ如キヲ名ケテ第四ノ道諦トシタルモノナリ然レハ第三ノ



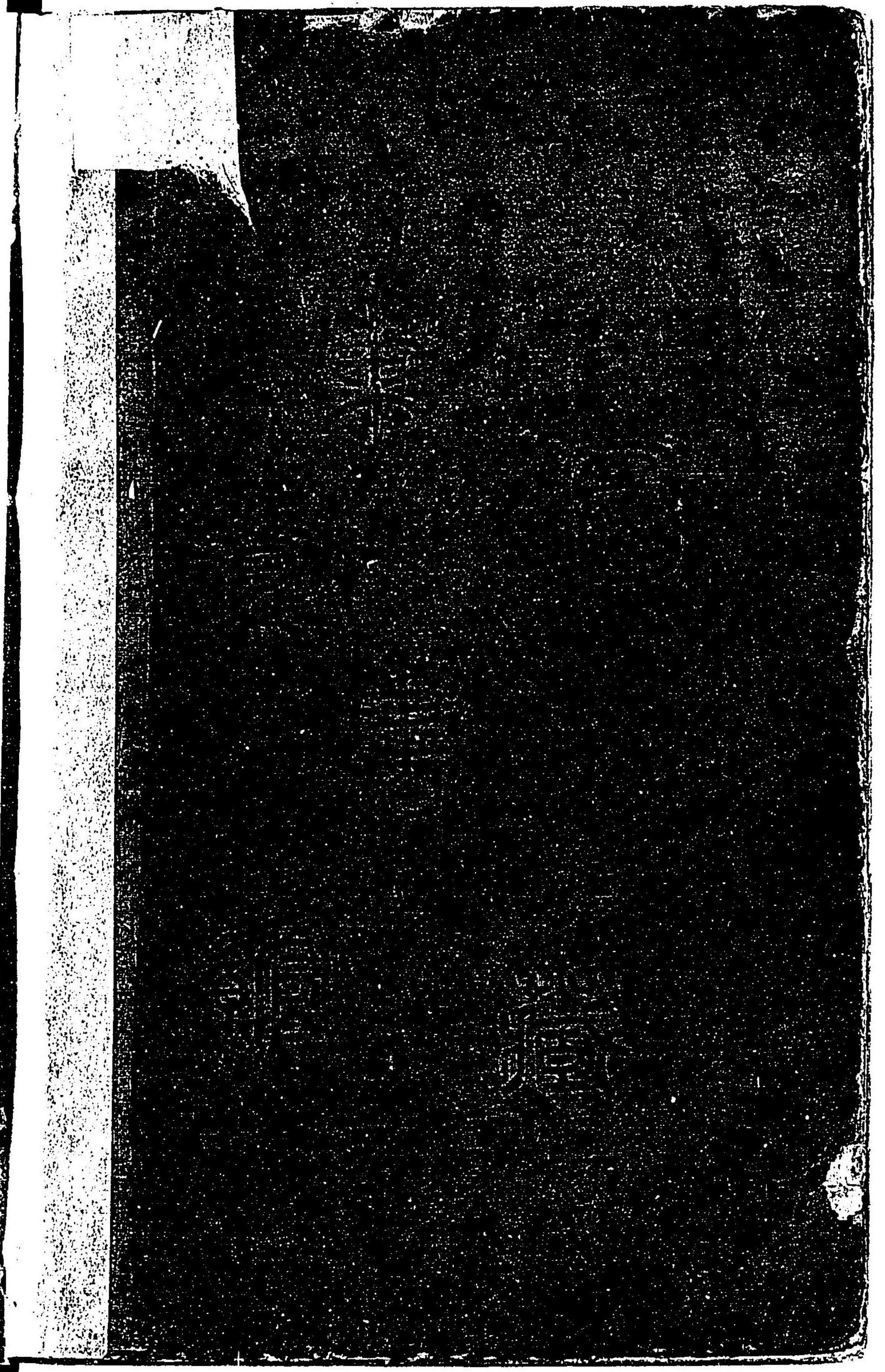
滅諦ト第四ノ道諦トハ悟ノ因果論ナルモノナリ如此生死輪轉スル所ノ迷ト云モ  
因果ノ理法ニ由ル又出離解脱ノ涅槃ト云モ因果ノ理法ニ由ル迷トモ悟リモ共ニ  
因果ノ理法ニ由ラサル者アルコトナシト云テ辨明スルガ苦集滅道ノ四諦ノ綱領ナ  
リ更ニ十二因縁ノ大旨ヲ辨明スヘキモノナレトモ違ナキカ故ニ之ヲ略ス

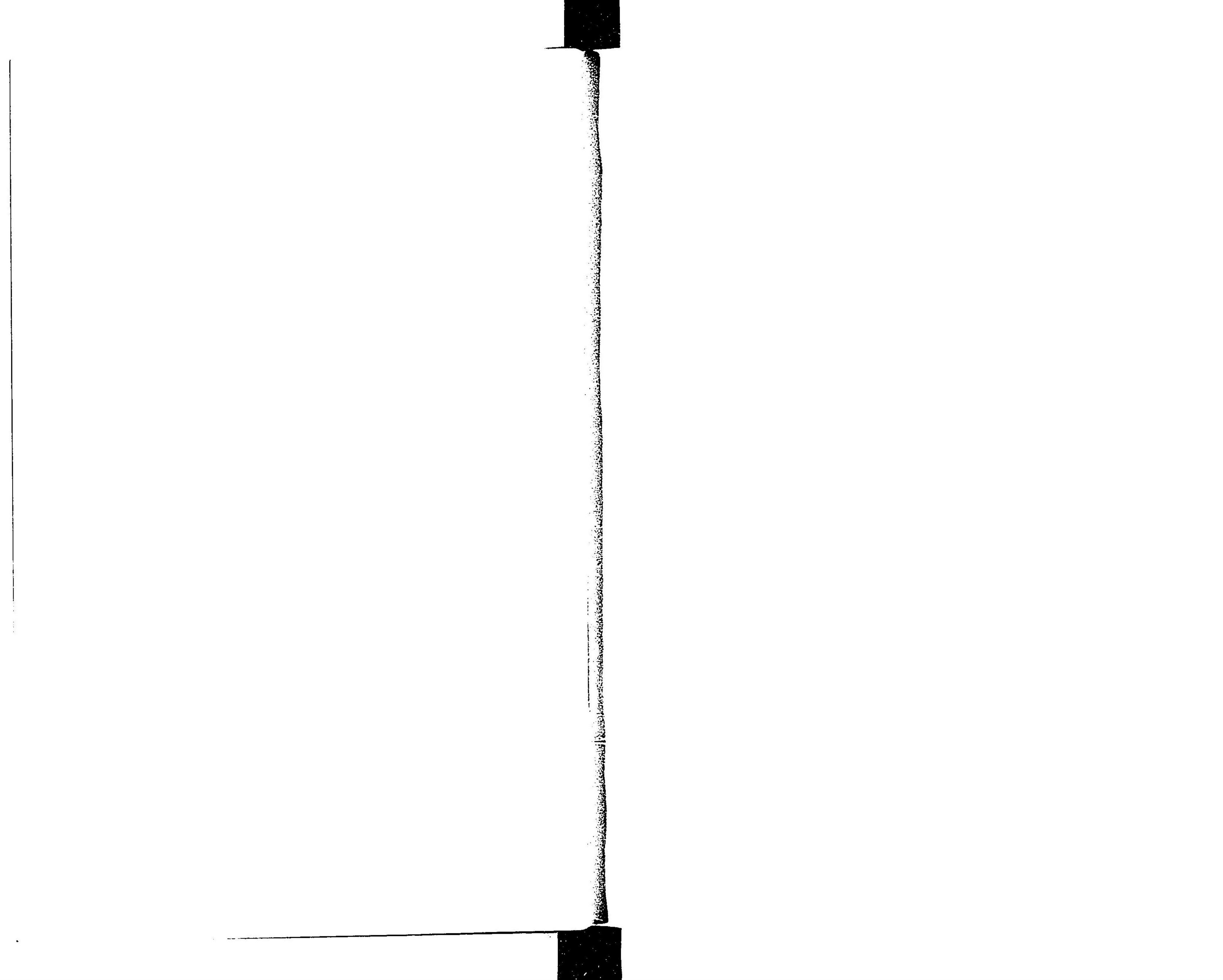
謝辭

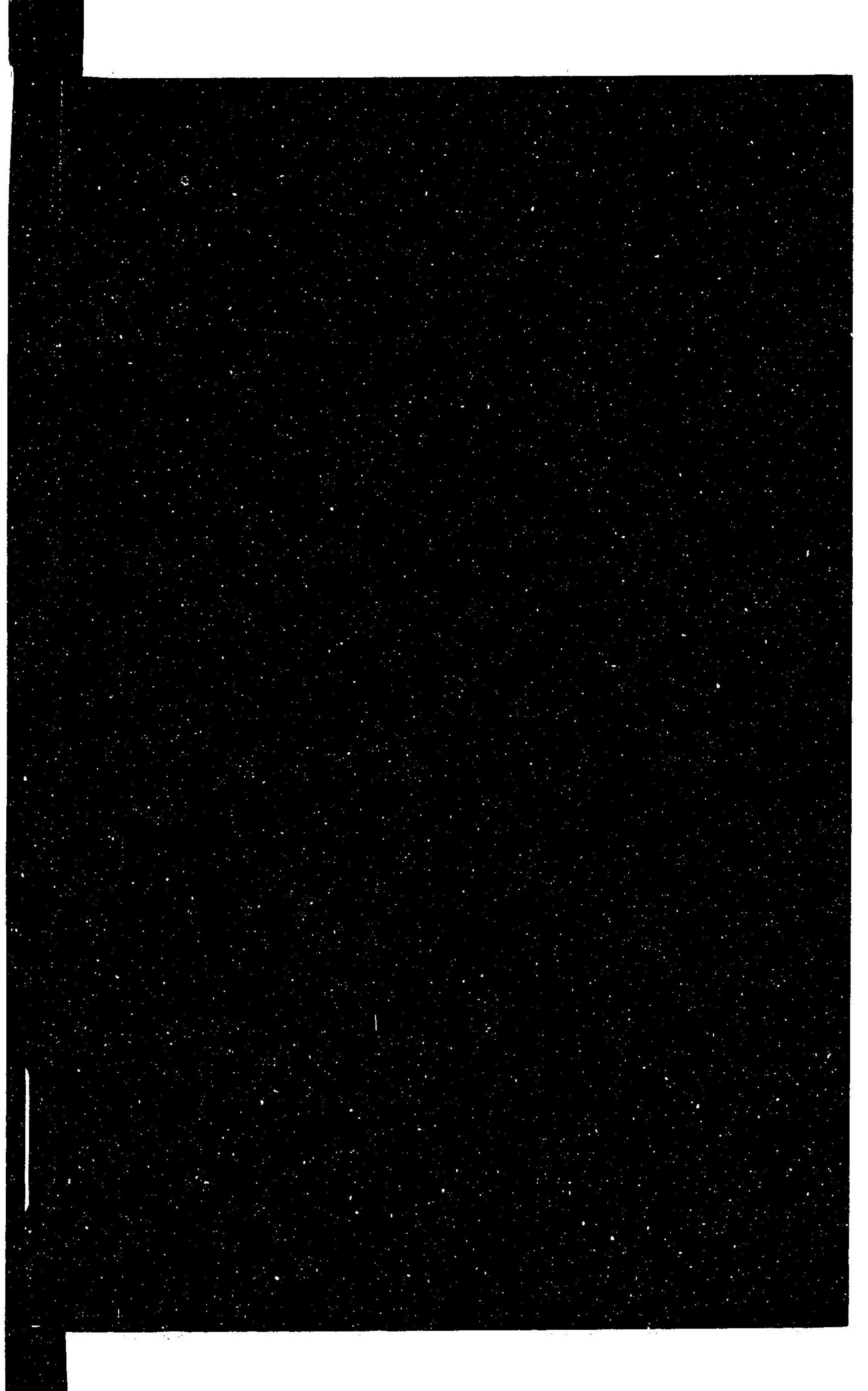
余は本年の講義録には佛教史を載すへきことを最初に約したり余最初の決  
心は勤めて之を本年并に次學年に跨りて貫徹せんと欲せしなり然るに圖ら  
ざりき本年四月より「佛教史林」と稱する歴史専門の大雜誌をば獨力にて發刊  
し毎月此に従事せり此がため歴史上のとは「史林」の方に載せざるを得ざる場  
合となり來れり依て最初の約に違ひ中途より他の事を講述せしとは一は自  
身の素志に對し一は讀者諸君に對し實に申譯なきとなれども亦止むを得ざ  
る次第なれば讀者諸君之を許したまへかし本學年の予の講義は此にて完結  
のとなすものなり

佛教編年史終

121  
220







14

220

Ⓜ

014737-000-1

14-220

印度仏教編年史 比較宗教学

村上 專精 / 著

M 2 7 ?

ABC-0026



14  
220

14

220

物  
類  
考  
略  
卷  
之  
七  
音  
字  
注  
此  
以  
後  
各  
類  
均  
同  
此  
例  
也

